「あなたは夏は何處に避暑に行きますか。」と聞いて見た。
「主に輕井澤に行きます。」とその宣教師は答へた。
「輕井澤のホテルは私も一寸或人を訪問して、外見だけを知つてゐますが、内部の設備はどうですか。」と聞いて見た。
「悪くもありませんけれど、ストーヴが無いのがいけません。」とその西洋人は答へた。
わざ〳〵、ストーヴを問題にするのが變だと思つて私は更にたづねた。
「夏ストーヴの必要はないではありませんか。」
「さうではありません。私はストーヴが好きです。ストーヴに赤い火の燃えてゐるのは大變靜かないゝ心持です。書物を讀む時でも、手紙を書く時でも、物を考へる時でも、ストーヴに赤い火のあることは大變に趣きを添へます。さうして心が落着きます。」
と宣教師は熱心に答へた。
その答を聞いた丈けでは矢張り夏ではないやうな心持がしたが、兎に角私は西洋人

か、われ等の想像以上にストーヴといふものに興味を持つてゐることを面白く思つて、その話はそれきりで打ち切つて、ストーヴの赤い火の燃えてゐる前に樣々の仕事をしてゐる西洋の男女を目の前に描き出して見た。さうして此宣教師がストーヴの上に持つてゐる興味を出來るだけ深く味はつてみた。

今私は山陽ホテルのストーヴの前に斯く兩手を翳して大きなアームチェアの中に身體を落し込むやうにして兩手を火に翳し乍らその宣教師の話を思ひ出すのであつた。さうして赤く燃え上りつゝあるストーヴの火を深い興味を持つて眺めた。何事も仕事をしないで只物の興味に浸つてゐるやうな靜かな時間が割合長くつゞいた。黑い石炭の上を這うてゐる赤い火は、だん〳〵と其舌を擴げて音を立てゝ燃えつゝあつた。さうして部屋の空氣もだん〳〵と暖まつて行つた。漸く退屈な時間が來たので私は昨日卓子の上に載せたまゝにして置いた二日前の東京の新聞を取り上げてその見殘したところを漁り讀んだ。そこへ扉をノックして姿を見せたのは此山陽ホテルの支配人の鈴

木潤亮君であつた。鈴木君とは既に昨夜食堂でいろ〳〵話をした。乃木大將が此ホテルに泊つたことかあるさうでその時の話などを鈴木君は詳しくした。もうホテル事業には數十年間たづさはつてゐるさうで、誰に對しても物慣れた調子で心持よく話し得る人であることが一見して分つた。さうしてその時、

「翌はどこか近所の名所でも見物したいものですが。」と私が言つたら鈴木君は、乃木大將の生れ故郷である長府の城下まで行つて見てはどうか、そこには大將が生れて育つたそのまゝの家を見ることが出來る。それは一度び無くなつて居つたのを昔の通りに再建したもので、その質素を極めた生活の狀態が自ら人の心を引き緊めるものがある。といつた。その長府行きは大分時間を要するらしかつたので、私はそれよりも平家沒落のあとである壇の浦を一見しようかと思つた。

「それは造作もないことです。」と鈴木君は言つた。そこで私はその積りでゐたのであつたが、此思はぬ大雪では果して車が通ふかどうかを心配した。鈴木君に椅子を勸めて、二人でストーヴに寄り添ひながら私は先づその事を聞いて見た。

「それは何でもありません。一人後押でもつければ樂に行つて來られますが、たゞ此吹雪に幌をおろしてゐては肝腎の途中の景色が見られないから仕方がないでせう。たゞ車に搖られて行つて搖られて歸つて來るといふことだけでは馬鹿々々しいですから、今少し樣子を見合はしてからになすつてはどうです。」と言つた。雪の日のストーヴの傍に興味を覺え初めてゐた私は强ひて壇の浦を見たいとも思はなかつたので鈴木君の意見に從つた。鈴木君は十臺の齡に和歌山縣の郷里を出てから今日に至るまでの身の上話などをした。

「二三年前激しい神經衰弱にかゝつて閉口しました。」と言つてその時の樣子を話したり、

「半搗米を食つてゐます。」といつて、それについての經驗談などをした。ストーヴの火はだん〳〵と燃え上つて部屋の空氣はいよ〳〵暖まつて來た。私は思ひ出して鈴木

君に話しかけた。

「兼ねゞこの下ノ關の河豚の話を聞いてゐたが、あなたは食つたことがおありでせうね。」

鈴木君は微笑し乍ら應へた。

「たゞ一度あります。けれども只一度きりです。其日歸つて來てその事を母に話したら母が大變怒つて、職務の爲めに死ぬるといふのなら兎も角、河豚を食うて死んだといふやうなことがあつたとしたら、何といふ恥さらしなことであらう。名を惜むものはそんな輕はずみなことをすべきではないと、さういつて大變立腹したものですから、それ以來は食はぬことにしました。」

「大變旨いものだといふのは本統ですか。」

「恐るゝ食つたのではさう特別に旨いとも覺えませんでしたな。」

私は今度下ノ關に來たら一度河豚を食つて見たいやうな心持がして居つたのであつ

た。下ノ關の河豚料理は安全なものと相場が決まつて居るので、料理屋の表には、「河豚御料理」といふ札が公然と表にぶら下つてゐるといふことを聞いてゐた。

「現に此隣の川卯でも河豚料理をします。」と鈴木君は言つた。さうして河豚の話はそれぎりになつてほかの話に移つてゐた。そこへボーイが案内して來たのは、朝日新聞記者の五十崎夏次郎君であつた。五十崎君は俳號を杏冲といつて舊い俳人である。關門方面の責任者として此地に來てからもう數年になるといふことを此間神戸で聞いて來たのであつた。私と同鄉の誼があるばかりでなく、日清戰爭中新聞記者として從軍したところから同じく新聞記者で從軍した子規居士とも知り合ひであつた。さういふ點で昨夜鈴木支配人に聞いて見たら鈴木君は無二の親友の間柄であるといつて早速電話をかけて呉れたのであつた。舊い友達といふものは懷しいものであるが殊に先輩子規居士の關係者であるといふところから、私は五十崎杏冲といふ名前に殊に或る懷しみを持つてゐた。然しながらどんな顏であつたかを思ひ出して見ようと思つてもどう

しても思ひ出せなかつた。それが今韃を排して這入つて來た顏を見ると、想像して居つた顏とは大分違つてゐた。こんなことは舊知に遇ふ時分の感じとしては珍らしいことのやうに思はれた。五十崎君のズボンの先きは少し汚れてゐた。外の往來の泥濘が想像された。

「珍らしい大雪だな。」と五十崎君は鈴木君を顧みて言つた。今迄冷たい雪風の中に晒されてゐた顏は俄に部屋の中の暖い空氣に觸れたので、だんゞと赤く染まつて來た。九州はもとより、朝鮮や支那あたりとの交通の咽喉であるところの關門詰めの新聞記者としては、常に人を訪問したり送迎したりする點に於て殊に强健な體質を要するであらう。五十崎君の如きは其點に於ても確かに適任といはねばならなかつた。烈しい神經衰弱に惱まされたといふ鈴木君に較べて見て、その赤い顏と頑丈な雙肩とは際立つて頼もしげに見えた。今朝鏡に映した自分の貧弱な身體をも思ひ浮べながら私は懷しげに此舊友の姿に視入つた。

「五十崎君は幾つにおなりですか。」

「もう駄目です、時代遲れの老朽です。此地へ來るのも初めは當分の積りで來たのですがもう七八年になります。」

さういつて五十崎君は大きく笑つた。それから五十崎君は此地にゐる同鄕の人々を思ひ出してゐるやうであつたが、

「來住君は御存じではありませんか。」

「あゝ知つてゐますとも。」といつて私は、又一人の舊友の顏を思ひ浮べた。これは五十崎君とは反對に、一緒に中學校に行つてゐる頃の面ざしをその名前を聞くと同時にまざ〳〵と思ひ浮べた。

「さう〳〵來住君もこちらにゐたのでしたねえ。」

「來住君も御同鄕ですか。來住君は矢張鐵道院の技師でありますから毎日のやうに私も出會つてゐます。」と鈴木君は言つて、それから五十崎君の方を振り返つて「知らせ

てやらうではないか。」

「知らせてやつた方がよからう。」

軈て鈴木支配人は出て行つた。

この山陽ホテルの一室で舊知に會ふといふやうなことは、五十崎君にとつては、その職業から來る必然の結果として、一年中に何度となく繰返さるゝ陳腐な出來事であらう。私にしてもこれが東京のホトトギス發行所や、鎌倉の宅での出來事であつたならば格別强い興味は引かないであらう。たゞこれが東京を去る三百里の下ノ關の旅宿の一室で起つた出來事である爲めに殊に感興が深いやうに思はれるのである。私は五十崎君と、舊い俳人の名前などをあげて暫く話した。その中には齋藤溪舟、杉村楚人冠、相島虛吼等の諸君の名前もあつた。

色の黑い脊の高い鐵道院の制服を著た來住君の姿は間もなく現はれた。來住君とは、

「お前が、あしが」といふ松山言葉で直ぐ話をすることが出來た。

「大分久して遇はなんだなア。」

「さうよ、もう二十年以上にもならうぞい。」

そんなことを言ひ合つて三人は互に年とつた顏を見つめあつた。皮膚の光澤が無くなつたとか、皺が出來たとか、鬢髮に白きを交へたとかいふことの爲にお互の容貌が稍々變つてゐると思つて注意して相手の顏を見るのも決して長い間のことではない。五分か十分見てゐるうちに、その光澤の褪せた皮膚も、皺のよつた額も、白きを交へた鬢髮も、悉く幼馴染の昔の容貌の中にとけこんでしまつて、此稍々老いた現在の顏が、卽ち昔の幼な馴染の顏であつたやうな心持ちになつてしまふのである。

「そこは寒いであらう。ストーヴの傍へお寄りや。」といつて私は自分の腰を埋めてゐるアームチェアを後ろに引いて一脚の椅子をストーヴの傍に置いた。

「いゝえこゝで結構。」といつて來住君は最もストーヴに遠い方の椅子に腰を下ろして

長大な軀幹をそりかへるやうにして兩手を胸の邊で組みあはした。さうしてその四角張つた顎から口元のところには微笑をたゝへてゐた。

そこへ又ボーイが一枚の名刺を持つて來て軈て姿を現はしたのは此ホテルの事務員である內田周一君であつた。今迄の四人はいづれも四十三四歳から五十歳位までの年配のものであつたのだが、內田君が加はつて一人二十臺の若い人を加へたことになつた。內田君は頭を長く刈つてそれをハイカラに分けてゐた。容貌は老いたやうにも見え、若いやうにも見える顏であつたが、然し兎に角若いのに相違なかつた。內田君は本院にゐる時私を見かけたことがあるし、又ホトトギスは多年愛讀してゐるので私には絕えず親しみを持つてゐる、といふことを鈴木君は既に昨夜私に話してゐた。この新來の客を加へて部屋の中の空氣はいよ〳〵緊張して來た。ストーヴはます〳〵燃え盛つてゐる。外面の雪はます〳〵降りしきつてゐる。

共通な話題を見出さうとする努力が總ての人にあつた。餘り部屋の空氣が籠り過ぎ

るやうだからといつて窓を少し明けて冷たい空氣を流れ込ましたのがもとになつて軈てホテルそのものが話題になつた。

「この山陽ホテルは、西洋人と日本人とどちらが多く泊るですか。」

「此頃は日本人のお客の方が多いやうになりました。」とさう內田君が答へた。

いくら日本人の客が多くなつても、ホテルの營業方針を西洋人の客の方に置かずに、日本人の客の方に置くといふことはまだ當分難かしからうといふ話が却つて局外者の方から出た。鈴木君も內田君も默つてゐた。私は不圖帝國ホテルの林支配人の言つたことを思ひ出した、

「私は日本よりも西洋の方で暮した年の方が多く、凡そ二十年も西洋に居ました。さうしてどつちかといへば西洋の方が好きですが、それでゐて日本に現はれた西洋趣味といふものは厭です。日本に居れば純粹の日本趣味の物の方がどれほどいゝか分りません。日本人の輸入した西洋趣味は悉く厭味なものばかりで一見して實に不愉快極ま

る。」と斯ういふ話を林君はしたのであつた。其時林君は帝國ホテルの食堂で、西洋人に日本人をとりまぜた食卓についてゐたのであつたが、著る物は洋服を著ずに、大島の著物に大島の羽織を著てゐた。私は此林君の言葉を思ひ出したのでそれを諸君の前に取次いだ。それを内田君は引取つて話した。

「此間も或西洋人が此のホテルに泊まつて一つの軸物を古道具屋から買つて歸つて得意でゐました。見るとそれは下らない山水畫でしたけれども西洋人は大變得意でゐましたが、そのうち私のところへ持つて來て、その繪の上に何か字を書いてくれといふのです。日本の部屋で見る軸物の山水畫には大抵賛があるものですから、それがないのが不滿足で私に書けといふのです。書いてやりましたがね……」

皆内田君の顏を見た。

「君書いたのですか。」

「えゝ書きました。」

五十崎君は大きな聲を放つて言つた。

「よく書いてやつた。それでいゝんだよ。」

「さうです、それでいゝんです。」と内田君は萬事呑み込み顏で言つた。

「それで西洋人はよろこんだですか。」

「えゝ大に滿足してゐました。」

一同は又笑つた、恰も内田君の字が金釘流の字であるといふことを間違ひない事實として考へてゐるやうに、内田君にどんなたしなみがあつてどんなに見事な賛をしたかといふことは考へやうともしないやうに。

「そこで。」と内田君は更に言葉をついでいつた。

「西洋人の前に、西洋風の建築や、西洋風の裝飾を持つて來るとその鑑賞の標準は自然に高くなるわけです。それはその方面に見聞するところが多いからさうなるわけです。ところが日本趣味のものを持つて來ると、その鑑賞の標準は非常に低くゝなつて

來ます。なぜなれば彼等は殆んど何物も知らないからです。私の贊で西洋人が滿足するのも其爲めです。さういふ點から言つてホテルなぞの或る部分の建築や裝飾などは日本趣味にした方が西洋人の客に對して有利かもしれません。然しホテルに泊る日本人の客には、それと反對に、反つて俗惡であつても日本人にとつて珍らしい西洋趣味の建築や裝飾の方が氣に入るやうです。さういふ點は我等當事者として餘程考慮しなければならぬ問題だと思ひます。」

年の若い內田君が熱心に話してゐる間に支配人の鈴木君は微笑を含んで、痩せた洋服の肩をつぼめて默つて聞いてゐた。航海に慣れた船長のやうに、過去何十年間の自分の經驗に大きな自信を持つて、若い者のいふことなどは總てその經驗の知識と自信との中に溶け込んでしまふものであるといつたやうな顏つきをしてゐた。

私の特に希望した日本料理が、間もなく別のルームに運ばれた。內田君の案內で皆其方に席を移した。

その部屋にもストーヴが心地よく燃えてゐた。風俗繪の書かれた日本の屏風が西洋の衝立代りに其部屋の一隅に置かれてあつた。卓(テーブル)の上には又た日本の膳が行儀よく竝べられてあつた。皆其處に着席してから、盃の獻酬はせずに、盃を擧げて一寸健康を祝するやうな眞似をして洋盃を口に持つて行つた。酒はもとより日本酒であつた。私は此一兩日腹を惡くしてゐるので酒は餘り澤山飲むまいと思つた。けれども盃を手にすると二三杯でやめることは出來なかつた。外面の雪の景色は窓から見えて居つて、時々枝の雪を拂ひ落す風の景色が寒さうに眼に映つた。けれども部屋の中は暖かであつた。さうしてストーヴの溫氣(うんき)は酒と共に私の頰を赤く染めつゝあることを意識した。

「來住君、河豚をお食(く)ひたか。」

「河豚は好物よ。」

「先刻鈴木君にも話したのだが、今度下ノ關へ來たら、河豚を食つて見ようかどうし

ようかと問題の一つにしてゐたのだが……」

「河豚は大丈夫さ。下ノ關の河豚なら安心してお食ひ。それも素人料理は險呑ちやが、この料理を持つて來た……」と膳の上に眼をやりながら、「川卯などなら安心なものちや。食ひたいとお思ひるのなら、早速註文しよう。おいボーイ、お前川卯に電話をかけて河豚があるか無いか聞いて呉れ。此雪で捕れぬかもしれないけれども、何とか工面をしてくれぬかと言つて呉れ。」

「一寸お待ちの。」と私は遮るやうに止めた。私は多少狼狽せずには居られなかつた。先刻鈴木君に話した時にも、私はたゞ「河豚を食はうか食うまいか」といふ問題を其前に置いた丈けの事であつた。今來住君に話しかけたのも、また同じことであつた。殊に先刻鈴木君の話を聞いてからは、親しく下ノ關に來て見ても河豚を食はぬ人がまざまざと目前に控へてゐるといふことが、其河豚を食ふといふ好奇心を鈍らしめやうとするのであつた。それだのに來住君は早や私が食ふものゝやうに決めてしまつて河豚

をあつらへやうとするのである。殊に雪中乏しい奴をも無理に探さゝうとするのである。私は多少うろたへざるを得なかつた。

「まア一寸待つとくれ。」

私は繰り返した。來住君は更に頓着なしに重ねてボーイに命じた。

「兎に角聞いて見たらいゝ。東京から珍らしいお客樣が見えて河豚が食ひたいと仰しやるのちやが、あるか無いか、何とか工面をして貰ひたいものちや、とさういつて呉れ」

ボーイは旨を領して退いた。此ボーイは白い上著を著た西洋料理の皿を運ぶボーイであつたが、それは最前から燗をした燗徳利を手に握つて少し勝手の違ふやうな顏をしてわれ等にお酌をしてゐたのであつた。そのボーイの姿が部屋から外に消えてしまつた時に、私は切腹を餘儀なくさるゝ人のやうな一種の悲しさを覺えた。

「川卯あたりの河豚なら決して心配はありません。來住君も言つた通り素人の手料理が時々失敗るのです。」と横の方から五十崎君が私を慰めるやうに口を切つた。

「五十崎君もたび〳〵食ひましたか。」

「えゝ〳〵。」と五十崎君は無造作に應へた。かういふ無造作な返事を聞くと私の心は幾らか落着くのであつた。

「鈴木君、君も今日は禁を破つて食ふことにしませんか。」と折角母君の一言を重しとしてその言に負かぬやうに心掛けてゐる孝行者の鈴木君を死出の道連れにしようとしてそゝのかして見た。

「まア僕は止しませう。」といつて鈴木君はもの柔らかに私の誘引を拒絶した。

そこへ顔を出したのは此地の俳人であつて關門日日新聞の記者である皐雞君であつた。つゞいて伸堂、指月城、潮東、紫峯の諸君が順々にこの部屋の中に這入つて來た。皆ホトトギス誌上では近づきの人々であるけれども初對面の人ばかりであつた。中に伸堂君だけは嘗て東京のホトトギス發行所に雜誌を買ひに來て、よそながら私を見たことがあるといつた。終にそれ等の人の間に「雪」「河豚」の二題を課して句を作る

ことになつた。內田君は以前からホトトギスを讀んでゐるといふことで、初めから句作の氣があつた。鈴木支配人、來住技師の兩君は此場合止むを得ず仲間入りをすることになつて、ほかのものが默つて考へてゐる間大きな聲を出して喋舌ることも出來ないので、仕方なしに十七字を竝べてみてゐる樣子であつた。私は窓に凭れて表の雪景色を見た。來住君と鈴木支配人とはストーヴの上に紙を展べて何か一二句認めてゐるやうであつた。

「腰をかけて俳句を作るのは始めてで變な氣持だ。」と言つた人があつた。

「全く始めてだ。」と他の一人は同じた。外の人々も皆笑つた。それは皆古くから俳句を作つてゐる仲間の人であつた。

酒とストーヴで上ぼせてゐた頭も、窓際の冷い空氣のところへ持つて行つてゐるうちに、大分冷却されて來た。さうして雪の實景を見ながら雪の句を考へた。

漸く雪の句を作り終つてから私は椅子に腰を下ろして今度は河豚の句に移つた。今

迄河豚の句を作つたことは度々あつたが、今日は何だか數時間の後に迫つて來てゐる河豚を食ふといふ一大事件がある爲めに、いつもの句作とは違つて、自分に利害關係のある切實な事件として考へねばならなかつた。私は又席上の俳人諸君に、河豚を食つたことがあるか無いかを聞いてみた。多くの諸君は皆あると應へた。その中に一人斯う答へる人があつた。

「私は食つたことがありません。私の家は代々河豚は食はぬことになつて居ります。」

それは伸堂君であつた。

「さうか、君は食はないのか。」と一同は伸堂君の顏を見た。

「下ノ關に生れて、下ノ關に育つて、それで河豚を食はぬのか。」と誰かゞ言つた。伸堂君は只笑つてゐた。

「さういふ人も無いことはない、僕の知つてゐる人だけでも既に四五人ある。」と皐鶏君は言つた。

下ノ關にゐる人でもその通りだとすると、他郷から來てわざ〳〵河豚を食ふなぞといふことは物好き過ぎることである。

「言ひ出したのが悪かつた。」と私は後悔した。丁度そこへボーイが來て、

「最前頼んでおいた川卯から返事が參りまして、河豚が漸く見つかりましたから、お待ち受けいたします。といふことであります。」といつた。

もう斯うなつては退つ引きならぬことである。と私は仕方なしに覺悟を決めなければならなかつた。

「さうか、見つけてくれたか。それはよかつた。」と來住君はよろこばしさうに言つた。

「たゞ河豚を食ふ前に、甘いものだけは食はない方がいゝといふことである。あしもそれだけは食はぬことにして居る。」

それは私が丁度、皿に盛つてあつたビスケットに手をかけて、半分ばかり食つた時のことであつた。

一　日

「それではこれもいけないのだらう。」と私は食ひ殘したビスケットを眺めて、その目を來住君の顏に移した。

「元來餡子のものがいけないといふのぢやから、ビスケット位かまうまいけれど、まア止めてお置き、その方が安全ぢや。」と來住君はビスケットの半片れにも多少の危險を豫想するやうな口振りで言つた。私は悲しかつた。丁度さういふ話を聞く時に、半片れを既に嚥下して居つたといふことは、運命が私を呪つてゐるやうに感ぜられもするのであつた。

來住君と他の人との間には多少河豚の毒に當てられさうな心持のした時分には、茄子を食ふといゝといふやうな話が始まつてゐた。嚮には來住君などの口から、全然危險のないものとして話されてゐた河豚が、いつの間にやら少しづゝ危險なものになりつゝあることを一層心細く感ぜざるを得なかつた。

そこへぱつと點つたのは電燈であつた。

「河豚を食ふ時間がいよ〳〵迫つて來た。」と私はその電燈を見上げた。他の人々はそんなことには一向頓着がないらしく皆默つて河豚の句に案じ入つてゐるやうであつた。私も若干の句を紙に書きとめた。今私の前に多くの人がゐる中で一番强く私を支配してゐるものは來住君であつた。否、もう今になつては來住君といふよりも、その川卯とやらの料理場の俎板の上に乘つかつてゐる一塊の河豚の肉であつた。今の私はもうどうしてもその河豚の肉からは逃れ去ることの出來ない運命のもとにあつた。

「人間といふものは妙なはめに陷入るものだ。」と私は考へた。前にも言つたやうに私は決して今夜河豚を食はうといふことは豫想だもしなかつた。唯だ河豚の話を切り出したが爲に食はねばならぬことになつてしまつた。其も私が言ひ出しただけでは何でもなかつたのだが——河豚を食はうと言ひ出したのではなく、河豚を食はうか食うまいかと躊躇してゐるといつた丈けの話であつたのだが——傍らに來住君なるものがゐた爲に私はどうしても今夜河豚を食はねばならぬことになつてしまつた。

「妙なはめになつて行くものだ。」と私は又考へた。人間が罪惡を犯すといふやうな場合もこれに似たものだらう。その場合は私の心にあつた罪の萠しが、忽ち來住君の如き惡魔にそゝのかされて瞬く間に罪を犯してしまふといつたやうな譯合になるのであらう。

「惡魔來住！」と心の中で繰返しながら來住君の顏を見ると、私は可笑味を覺えざるを得なかつた。此惡魔は河豚の問題よりもこれ亦妙なはめから未だ嘗つて作つたことのない俳句を作らねばならぬので苦吟の眉をひそめてゐるのであつた。

「私の俳號をつけて頂きたい。」と突然內田君は私に話しかけた。

「あなたのお名前は何とか云ひましたね。」

「周一です。」

「周一は厭な名前ではないぢやありませんか。俳號も其儘周一にしたらいゝでせう。」

「さうですか、それではさういふことに決めませう。」

「鈴木君の俳號は？」と誰かゞ支配人に聞いた。

「僕は以前和歌を作つた時分に、蓮塘と云つてゐたことがある。それでよければ、それを俳號に用ひてもいゝ。それでいけなければ別につけて貰はう。」

「來住君は？」と又誰かゞ來住君に聞いた。

「僕は枯木としようわい。」

「枯木はいゝ。」と笑つた人があつた。

「惡魔枯木。」と私は心の中でつぶやいて見た。枯木よりも寧ろ來住の方が響がよかつた。俳人枯木はもう句作の苦痛に耐へぬやうな顏をして言つた。

「僕は漸く一句出來た。もうこれで御免を蒙らう。それから今夜は他に一つの會合があるから、一寸その方に顏を出してそれから川卯に戻つて來よう。五十崎君、どうか君、僕に代つて川卯の方の周旋をしてくれ給へ。成るべく早く歸る積りだけれども、それでも膳につかずに歸るといふわけにはゆくまいから河豚の方は僕は割愛していゝ。

今日は澤山捕れないので僅かほかないといふことであるから、君等の方で心配なしに食つて呉れ給へ。」とさう言つて椅子から起ち上つた。

「成るべく早く歸ることにし給へ。」と五十崎君は答へた。私は私に河豚を食はすことを斡旋した來住君が無造作に河豚の座から逃れ去ることを心細くも思ふし、羨ましくも思つた。どうかした口實が出來て自分も河豚から逃れ去ることが出來たならどんなに幸福なことであらうかと考へた。けれども、此場合それは思ひもよらぬことであつた。斯くして惡魔來住君は長大な軀幹を扉の外に運び去つた。それは河豚の座から逃れ得たと同時に又止むを得ないはめに陷入つてゐた俳句の席からも易々と逃れ去つた事になるのであつた。

それから暫くの間、私は諸君の雪の句と河豚の句とを點檢した。

それが漸く終つてから五十崎君は、

「そろ〳〵出かけよう。」といつて椅子から立ち上つた。それはいよ〳〵川卯に席を移

すのであつた。他の諸君も立ち上つた。私も仕方がなく立ち上つた。

表に出ると、それは夕暮の雪の衢であつた。往來の雪も中央の方は大方踏みにじられて黑くなつてゐるのが、夕暮の色の中にもさだかに認められた。空から降る雪はもう止んでゐるので人は皆傘をもたずに歩いてゐた。私達は煉瓦の敷きつめてあるホテルの軒下の方を歩いて直ぐ隣合つてゐる川卯の方へ出かけた。そこはまだ雪が餘り踏まれてゐなかつたので、例令時々下駄を沒するやうなことがあつても足袋を汚す泥水のはね上ることは無かつた。私は斯くぞろ〳〵と雪の上を歩きながら、どこへ行くのかと自問してみて、

「河豚を食ひに行くのだ。」と自答することが、かすかな興味とかすかな恐怖とを伴つた。

川卯旅館の這入口の硝子障子を開けると、そこに鍵形の土間があつて、直ぐそこが

疊敷の廣間になつてゐた。皆その土間に下駄や靴を脱ぎすてゝ上つた。三十餘りと見える色の黒い脊の高い丸髷に結つた女中が一行を出迎へた。主人役の五十崎君が先にたつて階子段を上つた。私も他の諸君もそれに扈いて上つた。川卯といふ名前は曾つて此土地を通過して東京に歸つた人などからも聞いたことがある名前で彼の春帆樓などゝ共に建築も宏壯な立派な料理店であらうと想像してゐた私は、這入口や段梯子に既に多少失望を感じてゐたのであつたが、その階子段を上つたところにある二階の廊下も案外粗末なものゝやうに思はれた。一同は暫くその廊下に立つて女中の案内を待つてゐた。先きに立つて一室に這入つた女中と五十崎君とは再び姿を現はしてわれ等にその部屋に這入ることを促した。

部屋は可なり廣い部屋であつた。這入口に二枚屏風がたつてゐてその中は明るく灯つてゐた。私は女中と五十崎君とを先きにたてゝ他の諸君よりも一足先に其部屋に這入つたのであつた。その時忽ち私の眼を射た異様の物が一方の壁際に置かれてあつた。

私は立止まつてそれを凝視した。それは一つの大きな膳の上に、丸い大形の丼と、四角な平べつたい鉢とが載せられてあつた。その他になほこまゞ〳〵した二三の鉢が載せてあつた。

「これが河豚です。」と五十崎君はいつた。私は躍る心を押へながらその不思議なものを凝視した。大きな丼の中には凡そ三通りの肉があつた。一つは肴をあら煮にする時切つたやうな、骨も鰭もついたまゝ無造作に切つた生の肉であつた。それに並んで置かれてあるのは既に一度湯を通したものと見えて一片々々が皆反りくり返つてゐた。その他に今一つ、一寸見て何とも判別のつかないやうなものがあつた。私は氣味惡くそれ等を點檢し終つて後に、今度は平べつたい四角な皿の方に眼を移した。この方は白い半紙が上にかぶせかけてあつて、それには下の肉の水が浸み出してゐた。私が身體をかゞめてそれを視詰めてゐると五十崎君はそのかぶせてある半紙を二本の指でつまみあげて、その下にあるところのものを私に見せてくれた。

「これが河豚ですか。」と私は聞いた。
「さうです河豚です。」と五十崎君は答へた。
「さうすると此丼の方は。」と私は前に點檢した方の肉を怪しみ見た。
「それも河豚です。」と五十崎君は答へた。「この丼の方の生身は湯揚げにするのです。ちりといふ奴です。それから此平べつたい鉢にある方は刺身です。」
その半紙のかぶせてあつたのが刺身であると聞いた時に、私は再び心を躍らせながら凝視した。それは白い美しい肉が紙のやうに薄く切つてあつた。たゞ一列に貼りつけたやうに鉢に並べてあるその肉の下には朧ろ氣に鉢の繪模様が透いて見えてゐた。さうして何處ともなく落ちて來た煤であらうと思はれる黑いものゝその白い肉の上にとまつたのが鮮かに眼に映つた。河豚の肉は純白なものであるといふことは兼ねゞ聞いてゐたが、誠に其通りであつた。けれども私にとつては河豚の肉の美しさを嘆美するよりも、刺身まで食はねばならぬかといふ日前に迫つて來た危機の上に心を震は

せて、
「刺身は驚いたなア。」と歎息した。さうして、
「私かに奏て出すとか、小さい皿に盛つて出すとかするならばまだ殊勝であるのに、まだ客も來ないうちから座敷の一隅に堂々の陣を張らせて置いて人を脅かすなんかは餘りに惡黨過る。」と憤慨した。五十崎君は頓着なく猶ほ説明をつゞけるのであつた。
「この小さい鉢にあるのは藥味で、こゝにあるだしが最も河豚料理の自慢とするところです。それから河豚のちりに橙は附きものです。」
さう言つて五十崎君は其膳の一隅にころがつてゐる黄色い橙までも説明して呉れた。さうして今一つ私をおびやかすものがそこにあつた。それはよく芝居に出て來る大名などの手を翳す何とか火鉢といふ火鉢であつた。その火鉢がものゝしく河豚の膳の傍に置いてあるといふことが大に其陣容を助けてゐた。
遠來の客といふことで私は床前に坐らされた。

「河豚を食ふ人だけこちらに坐ることにしよう。」といつて五十崎君は私の直ぐそばに坐つた。この五十崎君の言葉から推すと、中には河豚を食はぬ人もあるのであらうと座中を見廻はして見ると、果してその中に伸堂君も居つた。初めから親代々河豚は食はぬ家憲になつてゐると旗幟を鮮明にした伸堂君が羨ましくなつた。さうしてその伸堂君の周圍にかたまつて坐る人の多いところを見ると、皆此席に會食しながら河豚を食はぬ人の方が多さうだといふことが益々心細く思はしめた。五十崎君は斯う説明した。

「河豚は四人前しか無いさうだから、四人だけこゝにかたまつて食ふことにして、あとの諸君は氣の毒だけれども普通の膳にして貰はう。」

さうすると今夜命を河豚に托するものは僅かに四人ばかりで、あとの諸君はさういふ危險に近寄らぬ人であるといふことが明かであつた。

そのうち彼の大名の手を翳す火鉢は私の傍に運ばれて、その中に火が入れられた。これで見ると此火鉢は河豚には何の關係もなかつたものであつた。尙ほ私の傍には上

方の宿屋や料理屋では必ず見るところの脇息が置かれてあつた。脇息に肱を突いて何とか火鉢に手を翳してさうして河豚を食うて死ぬるのだと思ふと悲しいやうでもあり可笑しいやうでもあつた。

軈て私の前にはちやぶ臺が運ばれ、その上に七輪が運ばれ、炭火の怒るが如く燃え立つてゐる上に鍋がかけられて、ちりの用意は整つた。これは皆色の黑い脊の高い彼の丸髷の女中の斡旋であつた。さうして先刻室の一隅に異鄕の客の心膽を寒からしめた河豚の陣營は直ぐ私の眼の前に移された。女中は大きな丼の中の彼の生の肉を挾んでは鍋の中に入れた。煮え立つてゐる鍋の湯は此怪物を受取つて躍り上つてよろこんだ。

その仕事が終ると女中はその丼の一方にあつた彼の茹られた皮のやうなものと、今一つ何とも判斷のつきかねた肉とを小皿に盛つて私の前に置いた。丁度そこへ長大な姿を現はしたのは來住君であつた。

「大變早かつたね。」と五十崎君はそれを迎へて直ぐ隣に席を設けた。

一日

「僕の食う分は迚てもあるまい。僕は普通の膳の方でもいゝから、珍客に十分満足を與へるやうにしなければいかん。」と來住君は河豚の料理の分量を心配さうに見た。

「四人分あるのだから大丈夫だ。盧子君と君と僕と、それに無何有君が加はればいゝだらう。」

「それでは他の諸君には氣の毒だけれども、河豚の方に加はらうか。」といつて來住君は私の傍に腰を下ろした。さうして無何有君は又私の一方に座を占めた。新たに此席に馳せ加はつたものは無何有、衣沙櫻、飛雨の諸君であつた。無何有君も、衣沙櫻君も皆雪を冒して門司から遙るゞ私を訪ねてくれたのであつた。無何有君とは久濶を叙し、衣沙櫻、飛雨の二君とは初對面の挨拶をした。

箸を持つたまゝで躊躇してゐる私を惡魔來住君が促すやうに言つた。

「その反つくり返つてゐるのは皮ぢやが、今一方のものは分るまい。それは皮と肉の間にあるものでみかはの間にあるから遠江といふ洒落た名前がついてゐる。始めて食

ふ人は皆これを一番旨がつて食ふ。」と私の皿をのぞき込むやうにして言つた。私は最早退つ引きならぬはめになつたので——それに最前から盃を取り擧げて既に數杯の酒をあほつたので大分勇氣も生じてゐたので——來住君の說明してくれたその遠江を箸に挾んで橙汁の絞り込んである汁の中につけて口の中に持つて行つた。橙の汁の味が舌に快い刺戟を與へて、つゞいてその遠江を嚙みしめる時の味ひも決して厭な感じを舌には與へなかつた。

「成程旨いものゝやうだ。」と私は多少これを賞味する心を誘發された。けれども思ひ切つてそれを嚥下する時には流石に氣味の惡さを覺えた。さうして私は盃の酒を二三杯つゞけ樣にあほつた。

彼の鍋から取りあげられた暖い湯揚げの肉も皿の上に移された。私はそれをも箸に挾んで深く〳〵橙汁の中に沈ませてから口の中に持つて行つた。それは殊に輕い一種の美味を感じた。河豚の味はおこぜに似てゐるといふ話を人から聞いたことを思ひ出

した。

四人以外の人の前には夫々膳が置かれてそこにも盃が擧げられつゝあつた。一體に皆の語氣が高まつて話に油が乘つてゐた。

「諸君も少しづゝ河豚を食つてはどうです。」と私は言つた。

「他の料理とは食ひ交ぜぬ方がえゝのぢや。それよりもお前もつとどし〳〵お食べよ、刺身も食べて御覽。」と來住君は又私に促した。私は一片の刺身をも口の中に落し込んだ。刺身の肉は湯揚げの肉を嚙んだ時とは全然違つた心持がした。味は矢張輕い味であつたけれども、それを嚙むときの齒當りの具合は鷄の生肉に彷彿たるものがあつた。

「鷄の刺身のやうにしこ〳〵するなア。」と私は驚嘆するやうに言つた。

「さうよ、肉は非常に堅いものぢや。」と來住君も言つた。

酒がだん〴〵廻つて來るにつれて私の河豚を挾む箸の數も多くなつて來た。一番に食ひ平らげたのは遠江であつて、流石に刺身は半分ばかり殘した。來住君は急に氣が

ついたやうに言つた。

「おイ、鰭はどうした。鰭は？」

「今日は生憎河豚が少いので……」と辯解するやうに女中は言つた。

「最前聞いたら向うの座敷にも河豚の客があるさうぢやないか。その方にとられたであらう。あれほど賴んで置いたのに不都合ではないか。」と來住君は腹立たしさうに言つた。

「よく聞いて見ませう。」といつて女中は起つて行つた。

隣室にも河豚の客があるといふことは人意を强うした。その上襖を隔てゝ河豚の座のあるといふ事がかね〴〵話に聞いてゐた下ノ關らしい心持を惹き起こさしめるのに十分であつた。

衣沙櫻君を中心に河豚の話が始まつてゐた。衣沙櫻君はまだ若い陸軍の將校で、日にやけた光澤のある顏の皮膚が豐かな引き締つた肉を心持よく包んでゐた。その顏に

微笑を含んで丹花の脣を開いて快活に話した。

「僕は暇さへあれば自分で船を漕いで釣に出かけて河豚を釣つて來ます。さうして自分で料理をして食ひます、大丈夫ですよ。」

衣沙櫻君は四五ヶ月前青島から門司に轉任して來たので元來此地の人でない許りか、此地にゐることも日が淺いに拘はらず極めて無造作な大膽な河豚黨であつた。下ノ關に生れて下ノ關に育つた河豚黨の面々も、自分で釣つて自分で料理して食うといふ事には少し驚いてゐるやうであつた。

「僕も自分で釣つて自分で料理をします。」と言つたのは來住君であつた。それから二人の間には河豚釣の話が熱心に交換されてゐた。何でも日を期して二人で釣に出かけるらしいことも評議されてゐた。その時大きな聲が隣室に聞えたと思ふと間もなく私の部屋にも闖入して來たのは何物かと思つたら、それは一人の男が手に握つた豆を座敷中に撒いて、

「福は內，鬼は外，」と叫ぶのであつた。

「成程今日は節分であつたのだな。」と一同は興ありげにその男のすることを見守つた。男はそんなことを四五度繰返して又隣室の方に移つて行つた。豆はころ〳〵と私達の膝元にまで轉がつて來た。

あとから參集した諸君は此席で又雪と河豚の句を作つてゐるらしかつた。さうしてそれ等の句が私の前に置かれた時に，私は又酒に湧きたつ頭を靜めてそれを見た。

そこへ又四五人の人が新しく這入つて來た。さうしてそれ等の人も雪や河豚の句を作つて私に見てくれといつた。それ等の句は私等の仲間が認めて俳句とするところのものではなかつた。それでも私は眼を通さないわけには行かなかつたので一應眼を通して返した。さうするとそれ等の人は又新たに澤山の句を認めて私の前に持つて來た。それを返すと又別の紙を持つて來た。

「もう僕は見るのが厭になつた。」と言つて私は其新らしいものは其儘で返した。その

中の一人が前に膝を進めて出て來て、私に俳句に就ての意見を徵した。私は斯う答へた。

「私はこゝに二十分や三十分諸君の前で俳句の話をしたところで、それは諸君に何の利益も與へないことゝ思ふ。それも諸君が私に對して或る信仰をもつて來てゐるのならばその短い談話の中にも多少理解するところがあらうけれども、頭から反感をもつて冷かし半分に意見を徵しに來たところで、それは何にもならないから止した方がいいでせう。それよりも僕の意見が知りたければホトトギスを御覽なさい。」

私はさういつて其一團の人々の顏を見た。諸君は皆善人らしい顏をしてゐた。私は此一團の人々の前でこんなことを言はねばならぬことを悲しく思つた。

それから今度は揮毫に取かゝらねばならぬ段取りとなつた。私は文字について何の自信もないのでいつも酒の力を藉らなければ筆を執る勇氣がなかつた。此夜はもう大分酒も廻つてゐる上に、河豚の毒も手傳つてゐるので私は何の屈托もなしに諸君の需

むるがまゝに書きなぐつた。中にも彼の一團の人々は先刻の句稿と同じやうに取り換へ引換へ短冊や色紙を突きつけた。

そこへ女中が持つて來たのはコップに盛つた一杯の液體であつた。

「有つたかい。」と來住君は大きな聲を出して女中の盡力を讃美するやうに言つた。

私はそれを手にとつて見た。コップの中に注がれてゐるのは熱い酒であつた。さうして其中に水族館で見る珊瑚珠の枝のやうなものが沈んでゐるのは、來住君の八釜しく言つてゐた河豚の鰭であることが直ちに直覺された。その鰭の先は黑く焦げてゐた。これは鰭を火であぶつてコップの中に入れその上に燗をした熱い酒を注いだものであることも直ぐ理解された。澤山出てゐる鰭の骨の先からは玉の如き泡が絶えず生じては浮き上つてゐた。それがコップを透して手にとるやうに見えた。

「それを鰭酒といつて酒飲みは珍重する。」と來住君は言つた。私は早速コップに口をつけて見た。芳烈な香ひが口から鼻を傳はると同時に鋭い味が舌を刺戟した。河豚の

毒は普通の酒を斯程までに强烈にするものかと驚き乍らも私は今迄の總ての河豚料理の中で一番好ましいものに思つて貪り飲んだ。稍々醒めかけた今迄の醉が數倍の勢をもつて盛り返して來るやうに思はれた。

私は頽然として醉うた。彼の一團の人々が先づ歸り、門司の人々が次いで歸り、最後に私達は一緒に表に出てホテルの前で分れた。

一人のボーイは部屋に歸つた私に別に用はないかと聞きに來た。私は明朝九時の汽車で發つことを話して、

「別に用事は無い。」と答へた。

ボーイの去つたあと扉(ドア)に鍵を下ろした。心持よく燃えてゐるストーヴの前の椅子に腰を下ろしてどれほど自分が醉うてゐるかを自分で考へて見ようと思つた。私の頭の中の血は激しい音をたてゝ流れてゐるやうに覺えた。私は確に平常より强度に醉つてゐることを意識した。河豚を食つたといふ追憶は河豚を食ふ以前ほどの恐怖は伴はな

かつた。けれどもどこかにまだ多少の不安の影はつきまとうてゐた。殊に此二三日來腹加減を惡くしてゐたことは一層其結果を危ぶましめた。

時計を見ると十二時を過ぎてゐた。

「兎も角寢よう。」と私は考へた。

「そんなことはないであらうけれども、萬々一河豚の毒に當てられたならば、今夜私は此部屋の中で悶死せねばならぬ。」

さう考へて私は部屋の中を見廻はした。そこには從來の如く二つの大きな姿見と、高いベッドと、テーブルや椅子などがあつた。矢張何人の入ることを許さない私の小天地であつた。今夜此部屋の中で死ぬるといふことはどこやら滿足な樣な心持もした。

「以前は死ぬるといふことが馬鹿に怖(こは)かつたのだが、此頃はどういふものだか死ぬるといふことは怖くない。以前は今死んでは大變だと考へたものであつたが、今は何時死んでも別に殘念とも殘惜しいとも考へないやうになつた。私は毎日々々自分のやら

うと思ふことをやつて居る。それがいゝことか惡いことかは私には分らないのである。たゞ私がやらうと思ふこと、又やらねばならぬやうになつて來たことをやるより他に私は私の身を處する道を知らないのである。そんな心持をもつてその日〳〵を暮してゐる私は、何時死んだところで殘念でもなければ殘り惜しくもないのである。又以前は私が死んだならば家族のものが困るであらうとか、仲間のものが困るであらうとかいふことも考へたけれども、それを困ると思ふのは現在生存してゐることを此上ないことのやうに思つてゐるから起る考であつて、斯く生きて斯く行動してゐることがいいのか惡いのか分らぬとすれば、それが遺族や仲間の者の幸福であるか不幸であるかも分らないことである。」

そんなことを考へ乍ら私は肱掛椅子に身を落としてもう半ばは眠りに墮ちつゝあつた。不圖氣がついて眼が覺めてから私は裸になつて寢衣に著替へた。その時不圖鏡に映つた私の身體は眞赤に染まつてゐるのに氣がついた。

寢衣に著替へてから投げるやうにベッドの中に身を横へた。

「死んだならば自分が無くなると同時に、自分の意識も無くなつてしまふのだから、即ち此世界といふものも無くなつてしまふのだ。」と不圖考へた時に、私は今迄歩いてゐたものが俄かに中心點を失つて礎と大地に倒れたやうな心持がした。自分の亡くなるといふことは恐怖ではなかつたが、此世界が無くなつてしまつて總てが無になつてしまふといふことは耐へ難い恐怖であつた。私は眼を大きく見開いて部屋の中を見渡した。部屋は無くならずにもとの通り存在してゐた。私は酒と河豚の毒とが音をたてて頭の中を流れてゐる響を聞き乍ら眠りに墮ちた。（大正六年三月）

一日

鎌倉。

家族を擧げて鎌倉に移住してからあしかけ八年になる。早いものだ。はじめは歸化英國人小林米珂氏の抱家にゐたのであつたが中頃から今の鍋倉氏の抱家に移轉した。よく人は、そんなに永く鎌倉に住まふ氣があるのならば自分で自分の氣に入つた家を建てたらばいゝではないか、といふ。私も時々そんな心持がせぬではない。けれども穴勝ち自分の好む通りに建てた家でなければ住み心地が惡いとも考へないのである。一體私には、滿足を望むと際限もない慾望が滿たされない以上は、なまじつかの註文を持ち出すよりは何でも眼の前に現はれ來つたところのもので滿足して置く方が却つ

て意に叶ふのである。例へて見れば一本の蝙蝠傘が買ひたいと思つて自分で東京へ買ひに行くとすると、私は何軒かの蝙蝠傘屋をあさり歩いたところで、これならば自分に満足だと思ふ蝙蝠傘には容易にぶつつからない。どの蝙蝠傘を見ても皆氣に食はないところが出來て來る。たゞその中で比較的いゝと思ふものを買つて歸つて來たところで、私は決してその蝙蝠傘を自分に満足なものとは考へることが出來ない。その蝙蝠傘が古びて用をなさなくなる迄その不満足はつきまとつてゐる。けれども、もし私の代りに家人を東京に買ひやつてその家人が見立てゝ買つて歸つたものであつたら、私はどんな蝙蝠傘でも満足する。それは家人が買つて來て呉れたといふことに満足するのではない、自分が選擇しなかつたといふことにあきらめを持つのである。家人が私と違つた趣味を持つて買つて來た蝙蝠傘よりも、不満足ながらも比較的自分の趣味にあつたものを選擇して買つて歸つた方が私自身の趣味に合つたものでなければならぬ筈であるが、それでゐて私は後者の方に却つて不満足を感ずるのである。自分に選

擇の自由がありながら、その好尚の満足されなかつたことは、どこまでも不満足である。けれど初めから、その自由を拋つてしまつて人任せにして置いた以上、その眼の前に現はれ來つたものは唯一のものであつて、そこに選擇の餘地はないものである。私はその唯一のものに満足を感ずる。

私は多くの場合此蝙蝠傘の例で推して行く。著物でも、帽子でも、毛布でも、鞄でも、大概家人任せにして置く。家人が買つて來たものを唯一のものとして満足する。時々むら氣を出して自分で選擇を試むることがないでもないが、その結果は必ず不満足になる。買つたものが、まづいものになるといふ譯ではない。自分の嗜好が十二分に満足されなかつたといふ不満足が何時までも附纏うて離れないのである。

家も其通りである。もし自分で家を建てるとなつたならば私の望みは數限りもなくある。一々それを満足さすやうな家を建てることゝなつた日には、それは僅かの資力で出來ることではない。假りに資力が十分であるとしたところで、大工が私の思ふ通

りに働いてくれるかどうかも疑問である。大工が働いてくれたところで私の思ふ通りのものが只一度で旨く出來上るかどうかも疑問である。私のぼんやりした趣味好尙は建てゝは壞し、建てゝは壞し、幾度もやりかへたものでなければ實際の形に現はすことが出來ないかもしれぬ。これを要するに建てる以上は立派なものが建てたい。十二分に私の慾望を滿足さすところのものが建てたい。さう十二分なことが出來るものでは無いから大概なところで我慢して置いたらよからう、などゝいふ人があるが、それは丁度蝙蝠傘屋に行つて比較的いゝもので滿足して置けといふと同じことで、いつまでも不滿足がつきまとふ。そんな中途半端なことをするよりも、理想的の家を自分で建築することが出來ない以上、私は借家で滿足する、丁度家人のもつて來た蝙蝠傘で滿足するやうに、借家といふ奴は銀行に金を預けて置くよりも、その方が利益だといふやうな胸算用から建てられたもので、そこには私の嗜好を充たす餘地は尋ねてもない。さういふ點から言つたら借家ほど殺風景なものはない。けれども兎に角そこに既

に出來上つてゐるものがあつて、それが表に貸家札を貼つて借手の來るのを待ち設けてゐる以上、それを借りて住まふといふことの上に、私は自分の趣味の滿足、不滿足を論ずる氣は起らない。私は滿足してそれ等の家に長い年月を過すのである。

小林米珂氏の借家を出たのも、こちらから好んで出たわけではない。その頃はまだ鎌倉能樂堂が出來てゐなかつたので、同好者は私の家に集まつて來て、朝から晩まで鼓を打つたり太鼓を打つたりして騷ぎたてた。それが丁度米珂君の勉强室の眞ッ正面に當つてゐたので米珂君が幾度かペンを投じて嘆息した揚句、終に私に立退きを要求したのであつた。それで仕方なしに移轉して來たのが、今の鍋倉氏の抱家であつた。私は此鍋倉氏の抱家に滿足して、もうあしかけ四五年は此所にゐる。鍋倉氏は東京に住まつてゐるので近所の大工が差配をしてゐるのであるが、此大工は流し元が腐つたから直してくれ、雨が漏るから直して呉れ、雨戸の闕が下つたから直して呉れ、などと言つてやつても容易には直して呉れぬ。たとひ直してくれても、ほんの上べばかり

の修覆であるから直ぐ駄目になつてしまふ。私は別にそれに對して烈しい抗議をも申込まぬ。いよ〳〵臺所が腐つてしまつて戸閉りも出來なくなるとか、いよ〳〵雨漏りが烈しくなつて天井が腐つてしまふとか、ます〳〵闇が下つて雨戸がばた〳〵庭に落つこちるといふやうな時が來たら、何うかしてくれるだらうと思つてゐる。緣は日當りがいゝ爲めに板と板との間が非常に隙いてゐて、冬は其間から吹き上げて來る風が馬鹿に寒い。もし此緣板を締めかへて足らぬ所は新しい木で補つたら此寒風の吹き込むのを防ぐことが出來るであらうと考へることもあるけれども、それもまアどうでもいゝと思つて其まゝにして置く。玄關から座敷へ行くのには、どうしても子供の勉强室にして居るところを通らなければならぬ。これは家族のものにとつても來客にとつても不便なことであるから半間の壁をぶち拔いてそこを開きにしたら便利であらうと考へるのであるが、それもまあ、どうでもいゝやと思つてそのまゝにしてゐる。表の戸が腐つて開け閉てにも不自由な位であつたが、去年の秋の大嵐の時に、その戸は吹

き壞されてしまつてしばらく松の木の元に横はつたまゝになつてゐた。兎に角嵐に吹き飛んでしまつたことだけを差配に報告してやつて、夜はその壞れたやつを門にもたしかけて置いて、そのうちどうかして呉れるだらうと思つて氣長く待つてゐたが凡そ一月位經つて後に新しい一つの戸を差配が持つて來て呉れた。一體が古びてる中に此門がひとり新しく白々としてゐるので馬鹿に目立つて見えた。けれども此新しい門もはじめから開け閉てが滑らかでなくつて開け具合が悪いと引つかゝつて引いてもしやくつても動かなくなる。初めから此調子では直ぐ役に立たなくなつてしまふかもしれぬ。よく見ると隨分粗末な木で、造りやうも存在である。初めから具合の悪いのも尤もな次第である。

私はこの鍋倉氏の抱家の奥の八疊の間に眼を覺ました。今日といふ一日がもうちやんと來てゐるのである。此一日々々が重つて、私が四十四歳の今日に到つたのである。又此一日一日が積り積つて鎌倉生活もあしかけ八年になつたのである。考へて見ると

人間の一生は夢の如く短く、却つて此一日が千里のやうに長い心持がせぬでもない。

私は布團の中から出て例の風の吹きぬく廊下を通つて寢衣のまゝで便所に行く。

便所を出てから直ぐ湯殿に行つて齒を磨き嗽ひをしてから寢衣をぬぎすてゝ湯につかる。これは鎌倉の宿に寢た時は必ず毎朝の定めとして居る。私の體量は此間も東京の風呂屋で捍扞にかゝつて見ると十一貫七百匁ほかない。なさけないほど輕い身體である。尤も一番壯健であつた時ですらも十二貫五百ほかなかつた。元來が骨細の脊の低い身體に生れてゐるのであるから十一貫七百でも決して悲觀するには當らない。只その十一貫七百で人並の仕事をすると隨分身體の疲勞を覺える。朝起きた時分にはいつまでも眠りを貪りたいやうな不活潑な狀態にある。それを呼び醒まして勇氣の滿ちた身體にしてくれるのは此朝の風呂である。初め朝湯は風邪をひくといふやうな話を聞いてゐたので餘り試みなかつたのであるが、そんなことはないといふ或る朝湯黨の說を聞いてから實行しはじめて見ると、正しくそんなことはない。湯冷めどころか朝

湯に這入つた爲に寒中の寒い朝も躊躇なく外出することも出來、仕事に取りかゝることも出來る。さういふことが明かになつて以來、私は鎌倉にゐる限り此朝の日課を缺かしたことがない。

石鹼を身體に塗りつけて、それを湯で洗ひ落してから鏡を前に置いて頰から顎にかけての粗髯を剃るのに三十分餘りを費す。今日は暇だと思ふ時は、此湯殿の中で費す時間が比較的長い。今日は出京しなければならぬとか、鎌倉能樂堂に出掛けねばならぬとかいふやうな場合は、此風呂で費す時間が比較的短い。

今日も隨分いろんな用事がありはする。現に能樂堂に囃子の申合せもある。けれども何時の汽車で出京するとか、能樂堂にも何時迄に出掛けねばならぬとかいふ延び縮みのない時間の制限があるわけでないから、ゆつくりと湯の中に浸かる。私は此湯殿の中に斯うやつて浸かつてゐるといつでも隈につくのは、此湯殿の一疊敷の板間が稍々いびつになつて、此所から見た左側の方が目立つて下つてゐることである。これは單

に根太が下つたといふやうなものでなくて、その左手の柱の根もとが腐つて、その爲に下つたものであらうかとも思ふ。今のうちに根つぎをして置かないと、間もなく容易に修覆の出來ない大破になるかもしれぬ。それよりもどうかしたはずみで此柱がどかつと下に落ちこむやうなことがあつた日にはあぶなくつて仕方がない。これも此前差配から大工を寄越した時に話したのであつたが、大工はたゞ檢分して歸つたばかりでその後直しにも來ない。これも仕方がないことゝしてだん〳〵下つて行くのに任して居る。今日も亦それが眼について多少氣になる。仕方かないや、そのうちどうかなるだらうと眼をそこから他にそらす。湯加減がよくつていゝ心持ちだ。今日何事をしなければならぬかといふことに就いて考へる氣にもならない。

斯ういふぼんやりしてゐる時間は私にとつて誠に尊い時間である。昨日繁忙なことにたづさはつて居つたといふ記憶も、一時間向うに又繁忙な仕事が待ち設けてゐることも、總て忘れてしまつて、際限もない過去から際限もない未來まで引きつゞいてゐる

悠々たる無爲の中に何時までも斯うやつてゐられるものゝ如く呑氣につかつてゐる。斯ういふ時間を持つことは私にとつて此上ない養生法である。此頃の私は少し忙し過ぎる。仕事が多過ぎる。それで割合健康が保てゝゐるといふのは、その忙しい間にこんな呑氣な時間を見出し得るが爲めであるかもしれぬ。斯ういふ時の心持は火事が隣家迄燃えて來やうが、海嘯が床の下まで打ちよせて來やうが、日米が開戰しやうが、暴動が起らうが、天地がひつくりかへらうが、そんなことには一向頓着のない心持である。況して柱の一本や二本腐つて落込む位のことは問題にならない。

私は二十臺はもとよりのこと三十臺になつても髯は一週間も二週間も剃らないことがあつた。髪は一月も二月も刈らないことがあつた。格別鏡に向つて醜いとか醜くゝないとかいふことを相談して見るでもなかつたが、その蓬髪垢面でもまだ若々しい血が若々しい皮膚の下に漲つてゐる間は、それほど醜いものゝやうに自分では感じなかつた。ところがいよ〳〵四十臺に足を踏ん込んでみると時々鏡に寫して見る自分の顏

は、皮膚は荒れて光澤がなく、眼球も濁つて光りが薄く、齒もよごれ、髮もこはばり、當年の紅顏は既に褪せて白頭翁とまではゆかないにしても、鬢にも顎髯にもだん〳〵と白きを交へつゝあることに氣がつく。自分の仕事はこれからだといふやうな考は絶えずあるけれども鏡裡に映ずる自分の顏は疑もなく老に向ひつゝある、衰へに向ひつゝある、そこで此頃になると髮は月に二度ばかり刈るし、髯は隔日に必ず剃る。斯くして强ひて自ら老に赴きつゝあることを忘れ、容貌のだん〳〵に醜くなつて行くことを、ごま化さうとするのである。今日もまた鏡立を前に置いて、それに鏡を置いて、安全剃刀を取出して髯を剃る。

鏡に映つてゐる顏は髯を剃ることによつて多少若々しくすることが出來る。然し同時に鏡に映つてゐる身體の皮膚は如何につとめても之を二十臺、三十臺の若々しさに引かへすことは出來ない。いくら御馳走を食つても、いくら養生法につとめても身體の皮膚の若さを呼びもどすことの出來ないことは、丁度西に傾く太陽を中天に引き戻

すことの出來ないのと同じことである。

髯を剃り終つてから鏡と鏡立とをもとの位地に戻さうとする機みに鏡立が壞れた。此鏡立といふのは一個が七八錢で買へる安値なもので、新しいのを買つて來ればいゝものを、それが何となく面倒臭いのでいつまでも此舊いもので辛抱してゐる爲めに、持ちやうが惡いと屢々こんな風に壞れてしまふのである。それをもとの通りに嵌めて壁にもたしかけて置く。

再び湯風呂の中へ浸つて又た悠々たる時間の靜かに過ぎ行く味ひを十二分に味つてから風呂を上つた。著物を著ながら見るともなしに見ると手の指の爪が醜くのびてゐる。硯箱の中から鋏を取り出して緣に立つて爪を切る。大分春めいて來た日影の湯上りの私の身體を包んでゐるのが流石にいゝ心持だ。私は斯うやつて爪を切つてゐるといつも思ひ出すのは蟻のことである。私の切つた爪が黑い土の上に落ると、地上を這つてゐる蟻は直ぐそれを見つけて恰も劍鉾を運ぶやうにその爪の片を高く差し上げて

引いて行く。私はその光景を見る度にいつも淋しいやうな可笑しみを覺えるのである。然し此頃の寒さにまだ蟻は出てゐない。爪の片は地上に飛び散つたばかりで日の光りを受けて光つてゐる。

朝の食卓につくとそこには今年三歳になる末女がゐるばかりで、ほかの子供は皆もうとつくに朝飯をすませて學校に行つたものと見える。そこへ周圍の庭の掃き掃除を濟ませて姉さん冠りの手拭をとりながら私の爲に茶を焙じてくれるのは長女である。私は自分の子供に飯の給仕をして貰ふといふやうなとは昔は豫期してゐないとであつた。子供がだん〳〵大きくなるにつれてそれが十九にも二十にもなつて嫁て他に嫁ぐ時の來ることを想像しないでもなかつた。然し乍ら其子供が私の衣服を縫うてくれたり、私の食事の世話をして呉れたりするといふことは考へて見ようともしなかつた。けれども此頃はどうかといふと、私は到る所で自分の子供や甥や姪などの世話を受けたり、仕事を援けてもらつたりすることに慣れてしまつて、最早それを怪しまないま

でになつてゐる。此間も不圖驚かれたのは女學校の一年生である次女が、白い前掛をして襷をかけて働いてゐるのはどうしたのかと思つたら、それは私の晩餐の用意をして呉れてゐるのであつた。私は斯ういふ事實を見るとたゞわけもなく子供の成長をよろこぶといふ心持にはなれないのである。子供の健かに成長して一人前の人間に成つて行くことがうれしくないことはない。けれども子供の成長の半面には自分の老衰がある。又子供自身にとつてもその成長の後には老衰が待ち設けてゐる。ひとり老衰ばかりでなく、その成長の直ぐ次ぎには浮世の辛酸が待ち設けてゐる。只大きくなつて行くから結構だといつて祝福して行く心持にはどうしてもなれない。けれども亦それだといつて成長して行かぬやうに彼等の年齢を堰き止める譯にも行かない。どうすることも出來ない。

私は今でも死ぬるまで子供の世話にはならない積りでゐる。お前の世話にならねばならぬ、といふやうなことをよく子供に向つて言ふ人がある。亡くなつた私の長兄な

どは、自分に子供が無かつた爲に却つて私に向つて屢々さういふことを言つた。それは私にとつて脊負ひ切れない重荷のやうな心持がして、子供心に一種の苦痛を感じたものである。私は自分の子供にそれ等の苦痛を與へたくないと考へる爲といふでもないが、お前等の世話になるといふことを子供に向つて言つたこともなければ又考へたこともない。私は最後の息を引き取るまで子供の世話にならうなどゝいふことは、今のところどうしても考へられない。私は病氣になつたら病院に這入つて醫者や看護婦の人情を抜きにした機械的の介抱を受けて死ぬるより他に道がないやうな心持がしてゐる。子供達の涙に濡れた情けに滿ちた介抱を受けるのが幸福であるといふやうな感じは一向しない。況して老後は子供の扶養を受けるといふやうな考は毛頭無い。けれどもこれも亦た自分の子供に着物の世話や食物の世話をして貰はうといふことを豫期してゐなかつたのが何時の間にかその世話を受けつゝあるのと同じやうに、いつの間にか又子供の扶養を待ち、その介抱を受けるやうになるのかもしれぬ。口はゞつたい

ことを言つたり考へたりせぬ方がよからう。成るやうに成るのである。

朝飯を了へてから座敷の火鉢の前に坐つて今日の新聞を見る。其中に帶封がしてある伊豫日々新聞を取りあげて讀む。此新聞は柳原極堂君が全力を傾倒して經營しつゝある新聞で、此新聞が極堂君の手に移つてから絶えず私の許に送つてくれるのである。

その伊豫日々新聞を讀んでゐると三面に黑い棒の引いてある記事があつて、それは市川左文治の死を傳へてゐるのである。あゝあの男が死んだか、と私は暫くの間其男の舊い思ひ出に耽つた。此男は田舍廻りの役者であつて私が十二三の頃土佐の方から松山に乘り込んで來た一座の花形として大分人氣があつた。その頃は嵐寛丸といつてゐた。狐忠信なんかをやると非常に身體が輕くつて、子供心に水際立つた藝のやうに思はれた。私の母も芝居が好きで、廻緣(くわいえん)になつてゐる關屋の未亡人などゝ一緒によく芝居を見に行つた。その度に私も大概ついて行つた。田舍の芝居のことであるから、棧敷代などは安いものであつたらうと思はれるが、それでも棧敷代などを拂つて行くこと

とは贅澤なことゝ考へられてゐたので私はいつも一枚の毛布を引つ抱へて、まだ夜の十分に明け離れないうちから木戸の前の群集の中に交つて其の開くのを待つてゐた。木戸が開くと一同がなだれ込む中に、私も交つて小屋の中に這入つた。多くの場合屈強な若者にはね飛ばさるゝので餘りいゝ所はとれなかつたけれども、それでも追ひ込みの片隅の方に毛布を敷くことが出來て、そこへ母や關屋の老人や、その他の人々の來るのを待ち受けてゐた時には父も謠本を寫してゐる机から離れて此仲間に加はることもあつた。

「どうも人に突きまくられてえゝところがとれなんだ。」と私が殘念さうにいふと、

「子供の力でこれ位なところがとれゝば結構だ。」と父は慰めるやうに言つたりした。

私は父や母の五十近くになつて出來た末子であるから、老父母の眼には殊に孱弱いものに思はれてゐた。その孱弱い子供が屈強な男の中に交つて追ひ込みの一隅を占領し得たことを勇者の仕事の如く褒めてくれるのであつた。それが又私にとつては芝居を

見ること以上の滿足であつた。それから芝居の始まる前には必ず三番叟があつて、その古風な儀式が濟むといよ〳〵その日の外題になつて、紛黛を施した多くの役者が古びた衣裝をつけて古びた揚幕の中から登場するのであつた。その中に舞臺に出れば心ず大向ふから聲が掛かつて湧くが如き人氣を脊負つて立つものは彼の寛丸であつた。

「中々達者にやる。」などゝいつて父もよくその寛丸を褒めた。

「身體が輕いものぢや。」と私の席よりもいゝ席を腕力をもつて奪ひ取つた隣りの席の若者も唸いてゐた。

此寛丸が松山に落ち着くやうになつたのは、いつごろのことであつたかはつきり覺えないが、その頃は他の土地に行つたかと思ふと又松山に歸つて來て、何度といふことなしに行つたり來たりしながら松山で興行して居つたやうに思ふ。その興行主は始終變つてゐたことゝ思ふが、或時その興行主になつた人は私の家の知合ひのものであつて、其人から或日家族のものに飯を食ひに來ないか、といふ案内があつた。他のも

のは皆差支へたので母と私と二人が出かけた。ところが意外にも席上には彼の寛丸が來て居つた。舞臺では見慣れた顏であつたけれども素顏で見るのは初めてゞあつた。その頃年齡は二十五六歲でゞもあつたらうか、素顏で見ても綺麗な顏のやうに子供心に思はれた。どんな話をしたか記憶には殘つて居らぬが、彼は席を起つて來て母や私に盃を貰つて丁寧にお辭儀をして引き退つたことなど覺えてゐる。

「子供の盃までを貰ひに來た。」とその後母が笑ひながら父に話した言葉を記憶して居る。それから一二年後になつてのことゝ思ふが、此寛丸は確か梅の家といつた料理屋の娘の婿養子となつて役者を廢業してしまつた。私は此寛丸が筒袖の着物を着て意氣な下駄を穿いて往來を歩いてゐるのにしば〳〵出合つたことがあつた。私は曾て一度盃のやりとりをしたことがあるので、向うは辭儀でもすることであらうと待ち設けてゐたがいつも知らぬ顏をしてゐた。

それから又數年經つて後のことである。私は上京して子規居士の家に寄寓してゐた

頃、居士は新聞社に來てゐた明治座の案內狀を持つて歸つて、自分は差支へがあつていけないから、代りに行つて見て來て呉れといつて私に渡した。私はその觀覽券を持つて始めて演藝記者の資格で、茶屋から案內されて行つた。左側の二階棧敷全體が記者席に當てられてゐたので私はその眞ン中邊に陣取つた。席上を見渡して見ると大槪如電、永井素岳、鈴木芋兵衛、幸堂得知、饗庭篁村、森田思軒などが元老株で、それにつゞいては三木竹二、伊原靑々園、松居松葉、永井鳳仙、杉贇阿彌などの諸君が居流れてゐた。先代の左團次を座頭にして一門一族が立籠つてゐた當時の明治座は歌舞伎座に次いでの大劇場であつて。土間も棧敷も空席のないほどの入であつた、外題は確か丸橋忠彌であつたやうに覺えてゐるが、捕手頭の士になつて出て來た一人の役者は市川左文次といふ藝名を新たに左團次から貰つた嵐寛丸その人であつた。寛丸が上京して左團次の門下になつたといふことは前から聞いてゐたけれども、東京の舞臺で親しく彼を見るのは此日が初めてゞあつた。私の眼にはその陣笠を着た捕手頭の姿が

格段に色強く印象されたけれども、記者席の諸君達は一向それを問題にしてゐる様子でもなかつた。只誰か一人が、

「あれが左文次といふ奴か。恐ろしく達者だね。名優だね。」と打つちやるやうに言つた。何でも十手を前に突き出して「それ者共。」とか何とか言つた時の様子が、その記者の反感を買つたものであつたらう。

これから中幕にならうといふ幕間の時であつたと思ふ。後ろの戸が開いたと思ふと茶屋の男が一人の役者を連れて挨拶に來た。それは師匠左團次の代理に來たものらしかつたが、その顏を見ると寛丸の左文次であつた。茶屋の男は、

「お馴染の左文次が御挨拶に上りました。」と言つた。私の傍に坐てゐた記者の一人は「お馴染の……」と口眞似をして笑つた。幸堂翁初めの元老連は、一寸振り返つて見たが直ぐ興の醒めたやうな顏をして向き直つてしまつた。斯くして左文次の鄭重な辭儀に對して挨拶を返したものは一人もなかつた。左文次は茶屋の男初め一同の冷やか

な環視の中にそこ〳〵に歸つてしまつた。

その後私は在京中の或松山人を訪問すると席上に左文次が來てゐるのを見受けた。其時私は直接に餘り話もしなかつたが、その主人に對して三階の大部屋にゐる苦しみを訴へてゐるやうであつた。けれどもその手振り足振りで話す様子がうはついてゐて、傍でそれを聞いてゐる私の同情を呼び起すことは出來なかつた。私は寧ろ輕蔑をもつて此臺の立ちかけてゐる大部屋役者を眺めた。

左文次といふ名前が明治座の番附から無くなつてしまつたのは、それから間もないことであつた。聞くところによると松山に舞ひ戻つて再び梅の家にゐるといふことであつた。尤も梅の家の養子分でありながら一修業を思ひたつて東京へ出て來たものであつたのかもしれなかつた。それももう二十四五年も前の話であるが、其後私は左文次のことについて聞いたこともなければ考へたこともなかつた。幾度となく松山に歸省もし、時には梅の家で飯を食つたことなどもあつたけれども、左文次のことは全く

思ひ出しもしなかつた。それが今突然伊豫日々新聞を讀んでゐるうちに五十幾つかで喉頭を煩つて死んだといふ記事を見て、あの男が死んだか、矢張松山に居たのか、と輕い哀愁を覺えた。殊にその記事の中に、晩年は松山や道後あたりの藝者の世話をして藝者達の遊藝がやゝともすると胡麻化しになるのを非常に憤慨してゐたといふやうなことが書いてあつた。そんな世話をしたり、そんな憤慨をしたりして老後の寂寥と不平とを慰めてゐたものであらうと思ふと、人事でないやうな淋しさを覺える。

貞さんが緣の拭き掃除をはじめてゐるので硝子障子が開けつ放しにしてある。そこから餘寒の風が吹き込んで來るのが寒い。私は曾て漱石氏を駒込千駄木の家に訪問した時のことを思ひ出した。それは丁度今頃の時候であつたか、或はも少し早かつたかと思ふ。漱石氏は障子の外に坐つて寒い風に吹かれながら庭の方を見てゐた。私も仕方なしにその緣側に座布團を敷いて話した。

「これは寒いですなあ。」と私は言つた。枯木が四五本ある殺風景な庭を吹いて來る風

は馬鹿に寒かつたのである。ところが漱石氏はこんなことをいつた。

「もう東風ですよ。東風が吹いてゐるのですよ。」

さういつて大空の方を眺めた。もう時候が春になつてゐるのだから成程東風も吹いてゐゝ筈であるが、その風は疑もなく北風であつた。これは漱石氏がまだ猫などを書く前の話であるが、今硝子戸を開けはなしにした緣から吹き込んで來る風はその千駄木の家で漱石氏が浴びてゐた北風よりは稍々暖い。これこそもう東風であらう。けれども緣に坐つてこれを浴びるのには、まだ幾分か寒過ぎる。

私は終に、火鉢に手を翳しながら机に凭れてせつぱつまつた仕事だけを一つ二つ片付けた。その他の仕事は半日か一日延ばしても差支のない仕事であつた。それ等は何の躊躇する所もなく半日か一日延ばすことにした。

私は鎌倉に居る日は大概日課のやうにして能樂堂に出かけるのである。能樂堂に行

かない時は、催能に關する用談か、さもなければ能樂に關係した雜談をしに本田邸などへ出かけるのである。私は曾て非常に腸を惡くした時分に、入院しようか遊ばうかと考へた末、終に遊ぶことに決めて、それ以來能樂堂建設を發起したり、年二三回の催能の世話をしたりなぞして、能樂にたづさはつて遊ぶことを唯一の怡樂としてゐる。けれども怡樂として遣る仕事もそれが年月を重ねて來ると自ら一つの義務となつて、樂みにも亦苦痛が伴つて來るやうになる。同じく能樂會の一員である富岡氏が曾て私に向つて、君は到底生涯此能樂堂から離れることは出來ない、それは能樂會創設の時から決まつてゐることである、と言つたことがある。其は道理ある言葉である。或はゆく〳〵は此能樂堂が私の爲めには限りのない重荷となつて、私はそれから逃れようと藻掻いても逃れることが出來ないやうな羽目に陷るかも知れない。もしさういふ時が來たら其時思ふ存分藻掻き苦むだけのことである。もし終に逃れることが出來なかつたら、身體をその波濤の中に埋沒させてしまふだけのことである。

今日もその能樂堂に出掛げる。その能樂堂は私の家から僅かに數百歩のところにある。その道端には人家もあるけれどもまだ畑になつてゐる部分の方が多い。私は能樂堂に通ふ度に此畑の中に起るところの造化の匆忙にいつも驚かされるのである。此頃はまだ麥が三四寸の長さに延びてゐるに過ぎないが、これが瞬く間に二尺になり三尺になつて眞赤に熟する時が來るのである。それからその傍に植ゑてある蠶豆は今は錢ほどの葉を重ねてゐるに過ぎないと見るのも瞬く間のことであつて、その枝には直ぐ紫の花をつけ、又ほどもなく長い莢にふくらんだ豆を包むやうになるのである。殆んど毎日のやうに能樂堂に通つてゐる時ですらも、その麥なり豆なりの成長の一日々々で形を變へて行く其慌しさに驚かされるのである。われ等が能樂堂に出掛けて行つて鼓の一拍子を覺え、舞の一手を習ふのにも中々長い歲月を要するのであるが、それは屈托があり、躊躇があり、迷蒙がある人間のことであつて、自然は何の遲疑するところもなく、生々化育の功を遂げてゆくのである、此能樂堂が出來てから滿三年の間、

三度の春秋を送り迎へして、その慌しい造化の匆忙を私はいつも興味をもつてながめるのである。

鼓の一拍子、舞の一手を覺えることに長い時間を要する爲に、人間のことは皆悠暢なものゝやうに考へてゐると、それは又大きな間違である。振り返つて見れば自分の頭には一日々々白いものゝ數を增しつゝある。內臟の生活力は一日々々と切り縮まりつゝある。更に翻つて自分の子供を見れば、その成長は、彼の麥や蠶豆の成長にも劣らぬ勢ひのもとにある。二三年前に姉娘の着て居つた着物を早や妹が着て居る。四五年前に兄の讀んで居つた教科書を早や弟が讀んでゐる。私の周圍に起り來るこれ等の現象は誠に眩ぐろしいばかりである。私は曾て私の家の軒下に生れた一疋の雌犬が、犬ころだと思つてゐたのは僅かに一二ヶ月間のことであつて一年經つか經たぬに早や雄犬にあとをつけられてゐるのを見た時、つくづく造化の殘虐を憎まずには居られなかつた。私は自分の甥や姪の家を作り子を產むのを見るにつけても亦同じやうな心が

起る。曾て「少女の友」を主幹してゐる星野水裏君と話した時、私の長女が遠からず婚期に達する、といふことを言つた時、星野君はつくづく斯ういふことを言つた。

「私は婦人の樂しい華やかな娘時代の長いことを心から希望します。親としては子供の婚期を失することはもとより心苦しいことでありますけれども、女學校を出るや否や直ぐ人の妻となり、直ちに又子の母となる娘にも憐憫の情を持たねばならぬことゝ考へます。生涯に再び來ない華やかな娘時代は、一年でも長いことを親としても考へてやらねばならぬことではないでせうか。」

その頃私の長女はまだ十五六歲であつたので、私は此話を意をとめて聞きはしながらも、それほどに强く感じもしなかつたのであるが、その長女が既に二十歲に達した今日になつて見ると流石に明け暮れ少女を友としてゐる人の言葉として面白く考へるのである。人生の春をして出來るだけ長からしめよ。娘を早く片附けてしまつて、それで安心したといふのももとより親の情である。けれども何も知らぬ娘を慌しく造化

の鞭の下に置くことが果して親の慈悲であらうか。

「人生の春をして長からしめよ。」

私は心の中でさういふことを叫ぶことが此頃は屢々ある。けれども亦翻つてこれを見れば、幾何の年限をもつて我等は長いといふのであるか。五年か、十年か。それも亦瞬く間のことではないか。長短を論ずるのも畢竟一瞬のその遲速を論ずるが如きものである。私は私の周圍に起り來る家族仲間の出來事を見ても、たゞ人生匆忙の感に打たるゝのみである。此日も私は暫く立止まつて麥の畑に眼をやり乍らこんな心持にとざゝれてゐた。その時耳に聞ゆるものは能樂堂から響いて來る鼓や笛の音であつた。

能樂堂に來て見ると既に澤山の人が集まつてゐた。これは近々この舞臺で催さるゝ囃子會の申合せをする爲の會合である。多くの人々は私の來るのを待ち兼ねてゐたらしい樣子であつた。私の妻も既に私より先に來て此席上にあつた。私の心は漸く緊張してやがて注意を此日の申合せの上に傾けることが出來た。今朝悠々と風呂の中に浸

かつて、限りない過去から限りない未來まで何の爲すところもない人間のやうな心持がして居つたことは、今はもう他人のことのやうに考へられるのであつた。

鎌倉の能樂會の會員は僅かに十の家族より成り立つてゐる。六十八歳の島村氏を筆頭にして、男子の會員は皆私よりも年長者である。卽ち私は會員中の最年少者として立つてゐるのである。それが私としては何よりも興味を喚び起すことである。今から二十餘年前にあつては、私は如何なる俳句會に列席しても大概一番の年少者であつた。その頃五十歳前後の鳴雪翁を頭に、あとは皆私よりも七八歳、もしくは四五歳の年長者であつた。その頃紅顏の少年として誰にも子供扱ひにされながら席末に坐して俳句を作つた興味は、私の忘れることの出來ないところのものである。それが年月を重ぬるに從つて私より年少のものはだん〳〵と殖えて來た。さうして此頃はどうかといふと、私は如何なる俳句會に列席して見ても大概一番の年長者である。もし鳴雪翁が加はゝつてゐられるならば、その場合は第二の年長者である。多くの年少の諸君から年

長者として取扱はるゝことは初めは不思議なことのやうに思はれたけれども、それにももういつの間にか馴れてしまつた。けれども年長者として立たねばならぬといふことは責任もあり、苦痛もあり、淋しさもある。それがどこの會に行つてもさうであるといふことの上には單調なところもある。さういふ境界にあつて私は鎌倉の能舞臺に來ると比較的一番の年少者として他の會員諸老よりも、若々しい一人であると感ずる上に無上の滿足がある。年長者らしく振舞はねばならぬといふ窮屈さは微塵もない。時には駄々を捏ねるやうな積りで諸老の前に我儘な振舞をさへして見る。既に婚期に達した娘を持つてゐる四十四歳の男であるといふやうな考は少しも頭にない。恰も當年鳴雪、子規の二先輩のもとに一番の年少者として俳句を作つて居つた時代と同じやうな延びやかな心持に住することが出來る。鎌倉能樂會は、此點から言つても私の安住の天地である。

私は羽織を脱いで袴を着けて直ぐ舞臺に上つた。舞臺には今「盛久」の申合せが始ま

つてゐるのであつたが、恰も大鼓を打つ人が缺けてゐたので私は拍子盤を前に置いて大鼓の拍子を打つた。ところ〴〵唯ひ違つたところがあつたので一應濟んでしまつて後に又繰り返してやつた。

こんなことをして時間を潰したり日を暮らしたりする上に何の利益があるのか、と疑ふ人が世間には多い。それは私にも分らない。たゞ斯の如くして時間を潰す目的の上にこゝに若干の人が集まつて鎌倉能樂會を組織してゐることだけは間違ひのない事實である。舞臺に上つて鼓を打つたり、拍子盤を叩いたりして間拍子をとるといふことは過ぎ行く時間を一分刻みに刻んで、その刻み具合の上に面白味を見出すのである。過ぎ行く時間を止めることの出來ない人間の弱い力も、間拍子を打つてその過ぎ行く時間を面白く彩ることの上には種々の工夫を凝らすことが出來るのである。斯の如くして過ごす三十分、一時間は春風が顏を撫でたやうな滑らかな感じのする時間である。私は曾て何かに一度書いたことがあるやうに記憶するが、私の或る一人の知人は如何

にして時を無爲に過ごすかに苦心しつゝある。彼は北海道に或る大きな農園を持つてゐる。彼は三十年後には必ずこの農園の成功することを豫期しつゝその經營は人任せにしてゐる。さうして自分は何事をもせずにその農園の成功する日を待ち受けることに苦心をして居る。彼は今迄樣々の事業をした。彼は一刻も自分の身體をじつとして置くことの出來ない活動的な肉體と精神とを持つてゐる。さうして今迄の種々の經驗や失敗から推して此の北海道の農園に自分の財產の全部を注いで三十年後の成功を待ち設けるより他に自分の生涯の計のないことを知つたのである。その爲に彼はその一刻も凝乎としてゐることの出來ない身體を持て餘して、どうかして無爲に三十年の月日を送りたいと苦心してゐるのである。私は此男の決心とその境界とを面白いと思つてゐる。一刻も休まずに勤勞することが人間の職責であるといふ議論に決して反對はしないが、中には無爲に生涯を終ることが人の爲にも自分の爲にもなることがある。さういふ場合に際して鎧衣の徒となるものもあれば、有髮の尼となるものもある。昔

は高位高官にあつてさういふ境界にゐた人も澤山あつたであらう。今は衣食に豐かな境界にゐる人であつて亦同じやうな心持を持つてゐるものも澤山あるであらう。近い例が此鎌倉の能樂會員中には海軍の豫備將官もあり、爵位のある人もあり、數十萬の富を有してゐる人もある。それ等の人はその晩年を如何にして暮さうかと考へた時に、過ぎゆく月日を小刻みに面白く刻んで、皷の音色や拍子盤の音でこれを美しく彩らうと志したのが斯く皷笛を弄するに至つた主な原因であらう。私の心持は北海道に農園を持つてゐる友人の心持と同じといふのではない。圓頂縞衣の徒の志を學ばうといふのでもない。又手近の鎌倉の能樂會員中の他の諸君の如く功成り名遂げてその晩年の清節を全うしようといふ人々などゝは同一に論ずるわけには行かない。それ等の人々が現世に對して豫後備の人であれば私はまだ現役のものである。爵位や富を擁して晩年をどうしようかうしようといふやうな、そんな呑氣な境界にゐるのでは固よりない。それでゐてそれ等の諸君に伍して能樂會の一員となつて此舞臺の上に乏しい生涯の多

くの時間を費し去らうとする心持は解するに苦しむ人が多からう。私とても明白に自らこれに答へるわけには行かない。たゞ人間に老をもたらし死をもたらす時間を刻んで之を面白く彩り弄ぶことは人間の皮肉な興味の一つではあるまいか。私達は「盛久」の彼所を間違へ此所を間違へたといふことに更に興味を持つて幾度もこれを繰返すうちに、時間は三十分を過ぎ一時間を過ぎるのであつた。

大小鼓を打つものが、鼓の音色で時を刻んでゐる間に、舞を舞ふ人は三間四方の白木の舞臺の上に立つて殆んど定まつた線の上を足で刻んで歩き廻はるのである。鼓が一ト所にあつて只時間を刻んでゐる間に、舞を舞ふ人は僅に九坪の板の間の上を、宇宙を切り縮めた無邊無限の天地と心得て刻み歩きつゝあるのである。扨て此一曲の意味は、盛久が源氏の兵に捕へられて鎌倉に送られ、由井ケ濱邊で既に斬に處せられようとした時に、平常信ずる觀音經を讀誦し、「刀刃斷々壞」の文句のところに來て、折節盛久の首を打たうとして居つた太刀取の太刀が根本から折れてしまつて用をなさな

かつた。恰もその前夜盛久の夢に一人の翁が現はれて、平常觀音を信ずることの厚いのを稱美し、我は清水の觀音であるが汝の命を援ける、と言つた。又同じやうな夢を賴朝も見た。そこで刀の折れた奇瑞に驚かされて賴朝は盛久を許して都に還すことにした。別れるに望んで盛久に舞を所望した。盛久は終に立つて一さし舞つたといふのである。會員の一人が此地謠を謠つてゐる間に、會員の一人は笛を吹き、一人は小鼓を打ち、私は大鼓をあしらひ、會員の一人は盛久に扮して舞ひつゝあるのであつた。運ばるゝ意味は盛久の歷史であるけれども、我等の味ひつゝあるところのものは殆んど共意味を離れて、時間を刻み空間を刻むその鼓の音色と、舞の手振りと、さうしてそれ等の調節とであつた。人を老いに導き死に導く殘虐なる時間は斯くして我等の弄ぶまゝになつて過ぎ行くのであつた。

「盛久」が濟んでから今度は「安宅」の小鼓を打つたり、「胡蝶」の地を謠つたり、又立つて「松風」を舞つたりした。「松風」が終つてから漸く席に復した私は、餘寒の肌にもわづ

かに汗ばむほどの快さを覺えるのであつた。

此時私は數日前此舞臺で催された演能會の時の興味を思ひ出さずにはゐられなかつた。今日こゝで申合せをして居るのは近々新たに催ほさるべき小さい囃子會の申合せであるが、其數日前の演能會の前などは殆んど毎日のやうに申合せに日を暮らした。これが能となると囃子に較べては自ら規模の大きなものになつて、一寸申合せをするにもなか〳〵骨が折れる。申合せばかりでなくその稽古でも容易なことではない。時には、

「自分は何の爲にこんなに苦しまねばならぬのか。」など、考へることもある。もともと樂みにしようと思つてはじめたことが、こんなに苦しいやうでは馬鹿々々しい氣がすると考へられるのである。けれどもその次の瞬間には、われ〳〵の仕事はそれが衣食の計になるものであらうとも、亦單に道樂と名のつくものであらうとも、それ

等はどちらにしても樂なものでないことに氣がつくのである。彼の北海道に農園を持つてゐる友人が三十年間を無爲に過ごさうとするその苦痛は、私達が衣食の爲めに奔走して繁忙を極める其苦痛よりも、もつと苦しいものであるかもしれない。それと同じやうな譯で、もと〳〵樂みの爲にはじめた筈の能樂も少しやりかけて見ると矢張本職同樣に苦しいものになるのであらう。そんなことは暫く問はぬことにして、われ等は此三間四面の舞臺の上を我身を入るゝ唯一の天地と心得て、古人の作つて呉れた舞の型や鼓の手に據つてその時その日を暮すばかりのことである。

此間の演能會の時には私は「羽衣」を舞つたのであつた。此日私は前夜が睡眠不足であつたので自分の番が廻つて來る二時間許り前一寸宅へ歸つて、せめて一時間でも晝寢をしたいと思つたのであつたが、なか〳〵さう容易く眠る譯にはゆかず、ぐづ〳〵してゐるうちにもう時間が迫つて來たので私は又能樂堂へ出かけた。舞臺に行つて見ると丁度「經政」の能の中ば頃であつて「羽衣」のワキの伯龍は既にあらかた衣裝をつけ

てゐた。そこで私は風呂敷包みの下著を抱へて物著のゐるところへ出掛けて行つた。先づ平常著を脱いで綿の這入つてゐる厚い胴著を著た。物著はその胴著の上に白い襟を二枚重ねてその上に箔の著附を著せた。又其上には赤地に金絲の織出してある腰卷と稱へる衣裝を著けた。

それから私は鬘桶に腰をかけてゐると、物著は私に鬘を著けるのであつた。鬘を著け終つた私は昨夜の睡眠不足がまだつきまとつてゐてぼんやりと眠氣を催すやうな心持であつた。欠伸がつゞけさまに出た。それでも何となく落著いていゝ心持であつた。不圖先刻宅へ歸つた時の光景を思出した。宅には貞さんと今年三つになる末女の晴子とだけが留守番をしてゐた。妻もその他の子供も殆んど家族を擧げて能樂堂に來てゐるので、たゞ晴子だけが家に取り殘されて貞さんは留守番旁々其の守りをしてゐるのであつた。晴子は私の歸つた物音が聞こえた時にそれは自分の爲に一番いゝ遊び相手になる直ぐの姉の宵子であらうと想像したものらしく、其が私であつたのに失望して、

「小さい姉さん、なかゝ歸つて來ない。」といつた。尙ほ貞さんの話すところによると、一人取り殘されてゐるのが大分淋しい樣子であるらしかつた。其ひつそりした宅の模樣と此華やかなざわめいてゐる能樂堂の模樣とを對照して考へてゐるうちに、私は不圖自分の幼い時のことを思ひ出した。私の父は恰も現今私が鎌倉能樂會の世話をしてゐるやうに、その頃の松山能樂會の世話をしてゐた。父は衣裝をつけてシテに扮することはしなかつたけれども、能樂會の事務を主管する上に、地頭として地謠の中堅になつてゐた。さういふ關係から東雲神社に能のある日は家族の者は大概皆それを見に行つた。それで宅はひつそりかんとしてゐた。私は學校から歸つて見るとたゞ嫂が一人淋しく留守居をしてゐた。私は書物の包みを上り框に投げ出したまゝで直ぐ東雲神社に出かけるのであつた。その三十年昔の東雲神社の能舞臺と宅との光景が恰も今日の鎌倉能舞臺と宅との光景に彷彿たるものがあることに考へ及んだ時、私の心の中には淋しい靜かさが漲つてゐた。さうして多くの見物人に交つて見所に來てゐる私

の子供達の上に考へ及んだ。私の子供達も親の好むところに準んでいづれも皆能樂が好きである。中にも友次郎などは一二度子形につかつたこともある。彼等が今から三十年向うに、私と同じやうに髪桶に腰をかけて私を追想する時が來ないとは限らぬ。

「それも瞬く間のことである。」とそんなことを考へてゐるうちに物著は私を鏡の前へ連れて行つてそこで面をつけた。面は小面といふ面で若い女の顏を刻んだものであつた。同時に頭に天冠をもつけた。其時鏡に映つた自分の姿はもう一つの天人に成りすましてゐた。さうして「羽衣」の囃子方や地謠は已に登場してゐるらしく、既に一聲の囃子が始まつてゐた。山崎樂堂君の大鼓の掛け聲も、本田夫人の小鼓の掛け聲も、今迄耳に聞いて居た多くの囃子とは違つた意味で力強く頭に響いて來るのであつた。軈てワキの伯龍の謠も聞こえて來て私の登場すべき時間は刻々に迫つて來るのであつた。

私は起ち上つて暗中を模索するやうな心持で揚幕の前に立つた。能の面には眼と鼻とに小さい穴が明けてある。けれどもわれ等がそれをつけて登場する場合、前方をのぞ

み得るものは只わづかに一つの眼の穴のみである。揚幕の前に立つた私は顏や頭の多くの部分を鬘や面で蔽うてしまつて唯だ暗黑の天地にあるのであつて、僅に左の眼の前の方に小さい圓形の光りの天地を認め得るばかりであつた。私は此時、

「いゝ心持だ。」と心の中で叫けんだ。今私は世界の總てのものから隔絶されてしまつてゐる。私はたゞ面の一つの穴からのぞみ得る光りの天地を持つてゐるのみである。朝から曇つてゐる此日の舞臺の光りは薄暗かつた。その薄暗い舞臺の上に笛、大、小、太鼓と四拍子が並んでゐて、それは人を或る空想の境地に導く爲に音樂を奏しつゝある。漁夫に扮したワキは松にかゝつた羽衣を手に取りあげて家の寶とするといつて持ち運び去らうとしてゐる。それは夢の世界である、現世から切り離された空想の世界である。暗黑の世界に立つて僅かに左眼に光りの天地を持つてゐる私はその時、

「お幕。」と、言つた。眼の前の揚幕はサツと上つた。私は靜かに身體をワキの方に向けながら、

一　日

「なうその衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。」と謠つた。私の心の緊張は絶頂に達してゐた。先刻のうつとりした氣分とは全く違つてゐた。

「これは拾ひたる衣にて候ほどに、取りて歸り候よ。」とワキは舞臺にあつて此方を見乍ら謠つた。私は徐々として橋掛りを出て行くのであつた。さうして歩き乍ら謠つた。

「それは天人の羽衣とて、容易く人間に與ふべきものに非ず。もとの如くに置き給へ。」

私はその謠を謠ひ終つた頃、丁度橋掛の眞ン中邊にあつた。私は先刻鏡に映つた自分の天人の姿を思ひ出す暇もなく、只緊張した心のもとに喟につゝまれ乍ら徐々として舞臺に出て行くのであつた。どうしても伯龍は衣を返さぬといふので、天人は雲のたゞずまひを見ても、雁金の空に歸るのを見ても天が戀しいと言つて、さめ〴〵と泣く動作をするのであつた。

「雁金の歸り行く天路と聞けばなつかしや。」といふところで私は雁金が正面から脇正面の方へかけてだん〴〵高く飛んで行くのを見送る形をしたりした。それから漸く羽

衣を返してもらつて、私は舞臺の一隅の後見座へ行つてそれを著せて貰ふのであつた。それは長絹と稱する長い袖の上著で、羽衣を想像するに足るやうな美しい衣であつた。尤もそれも先刻樂屋にゐた時に見た丈けのことであつて、今の舞臺にゐる私は固より何物をも見ることは出來ないのであつた。さうしてその長絹を著せてもらつて後の私は羽衣をつけた天人であるといふことを意識するばかりの事であつた。それから後は謠の文句や、笛の音や、大、小、太鼓などの節奏につれて扇を翳したり袖をかへしたりして私は舞ふのであつた。太鼓を打つて呉れてゐる人は能樂界の耆宿觀世元規翁であつた。

「愛鷹山や富士の高嶺、幽かになりて、天つ御空の、霞に紛れて失せにけり。」といふ最後の文句につれて私はシテ柱際で止め拍子を踏んだ時に、私は始めて此曲の終つたことを意識した。それから私は登場する時よりも稍々早い運びで橋掛りを通つて退場した。私に引き續いてワキもワキツレも囃子方も皆退場して來た。互に「難有う。」と

いつて挨拶を交はした。

其時私の空想境はもう破れてしまつてゐて、面や髪にくるまれた暗黑の天地も、左の眼からのみ見ゆる光りの天地も、もう自分の心をひくものではなかつた。それより も此一番の能を先づ無事に演奏した安心と滿足とに充ちてゐた。やがて物著に面をとつてもらつた。そこには明るい光りの現世が現はれ來つた。私は混雜してゐる鏡の間の一方に立つて衣裝をも髮をも脫ぎ捨てるのであつた。心持のいゝ汗が肌をも顏をも濕ほしてゐた。

私はその演能會當日のことを回想しながら、先刻立てつゞけに鼓を打つたり、謠を謠つたり、舞を舞つたりしたくたびれを休めてゐた。今舞臺にあつて囃子をやつてゐる人々も皆演能會當日は能をやつたり、囃子をやつたりした人である。數日前演能會を終つて、一年に三度催さるゝ大會のその一つを終つたことであるから、皆相當に滿

足もし、くたびれもした譯であるが、斯ういふ催しはそれをやる前の方に樂みが多くつて濟んでしまつたあとは却つて物淋しさを感ずるものである。會員諸君が演能に滿足してがつかりしたやうな心持でゐたのは僅に二三日間のことであつて、直ぐそのあとから新しい稽古に取りかゝり、新しい申合せをし、よし大規模の演能でなくつても、せめて囃子會位はやりたい心持になるのである。斯くして此小規模の囃子會は數日內に催ほされることになり會員は其申合せの爲めに今日一日をこゝに費しつゝあるのである。

此能樂堂の番人をしてゐる蒔田君は旗本の出であつて、一人の細君と共に古くから此鎌倉に佗び住居をしてゐたのであつたが、能樂堂が出來るについて番人としてこゝに住まふことになつたのであつた。蒔田君はもう五十が近いのであるが、子供は一人もないのである。蒔田君は顏も身體も痩せて細長く、何でも細長いものがあると直ぐ蒔田君だといふくらゐであるが、その細君の方は脊の低い小さい婦人であつた。此細君

は蒔田君よりも壯健らしく見えてゐたが、留守番に來て一年目位から病みついて數箇月の煩ひで亡くなつてしまつた。それから蒔田君は孤獨の生活を送つてゐるのである。自分で煮炊きもし、洗濯もするのである。天氣のいゝ日に表の物干竿に褌や襦袢が翻つてゐるのを見ると、これは蒔田君が男手で洗濯をしたのだといつも氣の毒に覺えるのである。又食ひ物も、小さい土鍋で飯を炊くのも面倒臭い模樣で、朝はパンを食つたり餅を燒いて食つたりなどしてゐる。衣食の上に何の樂みもない蒔田君は庭に半間ばかりの溫室を作つてその中に南洋產の蘭だとかその他面倒臭い洋名のついた草花の鉢などを入れて、その盆栽をいぢくることを何より樂みにしてゐるやうであつた。然しその溫室の硝子もいつか壞れてしまつて、それ以來は溫室を餘り使用せず、硝子障子の嵌まつてゐる日當りのいゝ南の緣側の隅にそれ等の鉢植を並べてゐる。われ等が鼓を打つたり、舞を舞つたりしてどこが旨く合はないとか、どこが少し早かつたとか遲かつたとかいつて遊び事の上にもやきもきと氣を揉んでゐるのを、蒔田君は全然

關知しない態度で、其緣の隅に蹲(しゃが)んで小さい如露の長い口の先から、その鉢植に水をやつたり、葉の穢れを筆で洗つてやつたりなどして三十分も一時間も靜まり返つてゐる。その腰の下部に卷きつけられてゐる帶は箍(たが)が緩んでずぼぬけさうになつてゐて、その帶から上の脊中が恐ろしく長いやうな心持がする。蒔田君が立つて歩いてゐる時でも此帶はやゝともすると腰を滑り落ちてしまひさうな心持がするのである。それといふのも肩の幅も胴の大きさも、腰の周りも、脚部も總て一樣の大きさのやうに思はれるので緩く卷きつけられてゐる帶は、其まゝ腰を通過して足の方にずり落ちさうな心持がするのである。此の蒔田君の盆栽道樂は多少會員の眉を顰ませないでもない。と言つたところで他に何も理由がある譯でもない。唯だ緣の隅に鉢植を並べてそれに水をやる爲に澤山のしみが緣の上に出來て、さうでなくつても掃除のとゞき兼ねる緣が、一見して頗る汚なく感ぜられるといふだけの理由である。けれどもそれ以外には格別な樂みもなさゝうな蒔田君の孤獨生活に同情してゐる會員は、面(めん)と蒔田君に口小

言をいふものは一人もない。

やがて會員は思ひ〳〵の書飯を申合せのひまを見計らつて食ふのであつた。私は此間の能の時の勘定について一寸分らぬところがあつたので、それを聞きに蒔田君の居間の方へ行つた。

蒔田君は寒い北受けの四疊半に坐つて、その前の長火鉢に長い手を翳しながらパンを燒いてゐた。蒔田君は此パンの片れ端で簡易な午飯を攝りつゝあるものと想像された。堅さうなパンが網の上に煙をたてゝ少し焦げて居る傍に、蒔田君は寒さうに首卷をしてゐた。

「能が濟んだと思ふと又つゞけさまに囃子會が始まるので、當分又毎日の樣に會合があるかもしれませんよ。」と言つて私は笑つた。蒔田君もその長い顏を動かして笑つた。

「此間少し頭具合が悪いやうに言つてゐたが。もういゝですか。」と私はきいた。

「もうさつぱりしました。演能會の時のやうに仕事が多くなつて來ると、どうも頭が

惡くなつて來て困ります。」と蒔田君は答へた。會員が油が乘つて盛んに舞臺に通ふやうになる時は、蒔田君は苦痛を感ずることが多いのであつた。靜かに長火鉢の前に坐つて雜誌を讀んだり、新聞を讀んだり、碁經を開けて見たりして居ることが蒔田君にとつて一番適意のことであつた。火鉢に火を入れるとか、茶を入れるとか、辨當の周旋をするとか、電話をかけに行くとかいふやうなことは凡て億劫に感ぜられるのであつた。會員の樂しさうな笑ひ聲が座敷で起る時には、蒔田君は淋しく新聞に眼を注いでゐた。會員の一人が大きな聲をして、

「蒔田君。」と呼ぶ時、蒔田君はそれに對して返事をするとが非常に億劫なことであるとを自ら意識して後に漸く返事をした。突然夜になつてから二三人集會する時などは、

「若しお宅の女中が手があいて居れば來てもらへませんでせうか。」などゝいふことがある。それは火鉢に火を入れたり、番茶を焙じたりすることが非常に億劫で、とても自分の力ではそれが出來ないと感じた時に言ふのである。われ等が夜更しをして歸る

時には、われ等が門を出るや否や蒔田君は直ぐその門の戸を閉めて鍵を下ろしてしまふ。一刻も早く自分の靜かな境地に戻りたいのである。

「座敷の方は大變暖で大分春めいて來たやうな心持がするが、こゝは相變らず寒いですね。」

「それでももう餘程違つて來ました。此部屋の寒中の寒さつたら……」といつて蒔田君はその時の寒さを思ひ出したやうに首を縮めた。さうして、

「今朝はまだ北風のやうでしたが、午前から風が變つてほんとうの東風になりました。」と障子の硝子越しに外面を見て言つた。風の方向や、氣溫の具合で鎌倉の天候を豫測することは蒔田君の得意なことの一つであつた。そればかりでなく鎌倉の地理にも明るくつて、蕗の薹を取りに行くのにはどこの谷がいゝとか、土筆を取りに行くのにはどこの堤がいゝとか、蕨を取りに行くのにはどこの山がいゝとかいふことをよく知つてゐた。防風を摘みに行くのにはどこの濱、若布を拾ひに行くのにはどこの濱、

などといふことをもよく知つてゐた。

「僕はぜんまいが好きだ。」といふことをいつか私が話した時に蒔田君はそのぜんまいの取れる山をよく知つて居るからいつか一度案内をしてやらうと言つた。

「高濱さんに歩けるかどうか。」などゝ私の足の力を輕蔑するやうな口吻で言つた。

「蒔田君の行けるところに行けないことがあるものか。」と私は言つた。

「どうだか。」と言つて蒔田君は容易に信じない口吻であつた。天地が春めいて來ることは、此能樂堂に蟄居してゐる孤獨の蒔田君にとつては何よりよろこばしいことであるらしく思はれた。舞臺では今太鼓も交つて或る一つの囃子の申合せが二三度も繰返されてゐた。太鼓の音も拍子盤の音も、蒔田君の胸には何の響きをも傳へぬたゞの噪音として聞えてゐた。勘定についての分らぬところは蒔田君の紙の端の記錄を見ることによつて直ぐ分つた。私は座敷に戻つた。

申合せはそれからそれへと進んで行つて殆んど日暮れまでかゝつた。晩食は島村老

をはじめとしてくるま座になつて皆一緒にとることにした。各々の前の御馳走は大した御馳走ではなかつたけれども、それでも申合せといふ或仕事を完了した滿足のもとに皆樂しく箸をとるのであつた。島村老と私とは一本宛の燗徳利を前に置いて宅に居る時と同じやうな晩酌の盃をあげた、われ等と共に鼓を打ち、笛を吹き、太鼓を打つ會員の細君達も膳部の世話をしながら共に箸を執るのであつた。可笑しな言葉であるけれども、複數の一家族といふやうな心持のするのが此鎌倉能樂堂の會員相互の心持であつた。

此時ふと鎌倉幕府時代の塔の辻の光景が繪の如く私の眼の前に浮み出た。塔の辻といふのは此能舞臺の建つてゐる土地の字（あざな）である。曾て私は何かを讀んだ時分に丁度今能舞臺の立つてゐる此塔の辻に、幸若の舞臺が出來て居つて、そこに鎌倉時代の老若男女の多くが打ち集ふて見物してゐるといふ樣な記事があつたことを記憶して居る。

「丁度其あとに能舞臺を作るやうになつたといふことも、不思議の因緣である。」とそ

の時考へたことであつた。同じ土地に毎年芍藥や百合が芽を吹き出すといふことが不思議でない以上は、幸若の舞臺のあつた土地に數百年を隔てゝ能樂の舞臺の出來たといふことも別に不思議なことでもないやうな心持がするのであつた。鎌倉の能樂堂はわれ等數人の力で出來上つたものゝやうに考へてゐるのは淺墓な考へであつて、われ等の想像の及ばない或る力があつて、それが春の土に芍藥の芽や百合の芽を吹き出すやうに、鎌倉能樂堂を此塔の辻に建立させたものかも知れなかつた。さうしてその力は何であるか？私の眼の前には再び鎌倉時代の塔の辻の光景が描き出された。そこには我等が幼い時田舍で見たやうな蓆がけの小屋があつた。その中には繪で見たやうな扮裝人物が登場してゐた。これは皆幸若の役者であつた。之を見物してゐる人には町人もあれば百姓もあり、又武張つた鎌倉武士もあつた。蓆圍ひの小屋だと言つた丈けでは殺風景に聞こえるけれども、その當時にあつては近代の猿若町や道頓堀を想像するやうな其當時の所謂盛り場であつたに相違ない。新らしく鎌倉に家を作る人の話

を聞いて見ると地形を作らうと思つて土地を掘ると往々にして其下からは人馬の骨を掘り出すさうである。殊に和田塚の近傍なぞになると夥しい人間の骨を今でも掘り出すさうである。此鎌倉の地下には歴史が説明するだけでも夥だしい人の骨を埋めてゐるのである。今は夏になると海水浴の脱衣小屋が澤山立並んで、都人士が雑沓して汐を浴びに來る由井が濱の如きも、當時の刑戮場として幾多の血を流し骨を埋めたか測り知られぬことである。此塔の辻の地下にはそれ等血なまぐさい骨は無いかも知れぬが、又別種の人間の力が深く埋沒されてゐることは爭はれない。その土を掘り地形を作り新たに建築された鎌倉能樂堂はもと百花千芳咲き競つてゐた牡丹の園が一度荒廢してしまつた跡に、突として又一株の新芽を吹いてそこに花をつけた心持がせぬでもない。

「何事も力ですな。」と私は島村老に言つた。

「さうですとも。」と島村老は答へた。

食後更に二三の囃子が催されることになつたので、私は又舞臺に上つて鼓を打つたり謡を謡つたりした、夜になつてからの拍子盤の音は、長火鉢の傍に坐つてゐる蒔田君の頭には一層強く響き渡つた。七時頃に散會するかと思つた會員はそれから尙雜談に耽つた後、漸く九時前になつて散會するのであつた。その雜談といふのも次回に催さるべき袴能の番組のことなどであつた。七月の末に催さるべき番組について三月頃から話しあつてゐる人の心持が蒔田君には分らなかつた。

「番組を決めるまでが一番樂みだ。」と曾つて會員の一人が言つたことがあつた。能の番組を三度び決めると一つ齢をとるといふことなどは氣がつかないのであらうか、と蒔田君は不思議に思つた。又たそんなことの空しい評議の爲に彼の靜かな夜の二時間を奪ひ去る人々の所業を蒔田君は腹立たしく思つた。

會員が漸く退散したのは九時に十分前であつた。私が殿りで表に出るや否や蒔田君は戸を閉めて掛金をかけた。夜になつて一層暖かになつた大空には春の月がかゝつてゐた。われ等が春の月を仰ぎながら麥畑の中道を通つて行く時に座敷の雨戸を閉めて

ゐる蒔田君の姿が手にとるやうに見えた。

宅へ歸つて見ると燈火が明るく點つて、子供等の聲に貞さん澄さん等の聲も交つて賑かに笑ひさゞめいてゐた。くたびれた心持で玄關を上つた私は、それ等の笑聲と沒交渉なものゝやうに其燈火の部屋に這入つて行つて火鉢の前に坐つた。妻の顏にも矢張同樣疲勞の色が漲つてゐるやうに見えた。席上には古新聞の擴げられた上に土筆が山のやうに積み上げられて、めい〳〵の前にも同樣に古新聞が擴げられて皆その土筆の袴をとつてゐるのであつた。

「大變澤山とれたのね。」と妻は言つた。

「今日は今迄のうちで一番澤山とれましたよ。」と澄さんは應へた。

「どの邊へ行つたの。」

「佐助の方から壽福寺の方へ廻つて來ました。」

「六ちやんのお墓へお詣りして來てよ。」と宵子は口をはさんだ。六子といふのは私の四女で宵子の妹に當るのであるが、今から三年前に三歳で亡くなつて、その墓は壽福寺の境內にあるのである。生れてから虛弱であつたので三歳になつてもまだ十分に口が利けず、首の骨もたしかにはきまらなかつた。弱い子だけに、母親はもとよりのこと、貞さんなどの愛も人一倍深かつたやうであつたが、それでも、

「此まゝで大きくなつたらどうしたらいゝだらう。」といふ心配は誰の心にもあつた。私の知人の子供で腦膜炎をやつた爲に身體は發育しても、物も言へず首の骨もきまらず、足も立たぬものがあつた。その父母や祖母などは骨肉の慾目から、大分首がきまつて來たとか、少しは物が分りかけて來たやうだとかいつて喜んでゐるやうであつたけれども、他所目に見ると少しもそんな樣子は見えず、いつまでももとの通りの狀態であつた。あんなことを言つて漸く氣やすめをしてゐるのであると思ふと、その父母や祖母の心持が思ひやられて氣の毒であつた。

「六子が此まゝで成人したら、あの子のやうになりはしないだらうか。」といふ不安は私の心の中にもあり、妻の心の中にもあつた。殊に腦を冒されたのは、或時烈しく風邪を引いて肺炎らしい症狀になつて四十度ばかりの熱が十日以上もつゞいて退かなかつた時其看護を誤つたのであつた。肺炎だと思ひ込んでゐた爲めに枕元に澤山火鉢を置いて、それに湯を入れた金盥をかけて室内の空氣を暖めたり濕潤させたりすることのみを目的としてゐたので遂に腦症を起したものと思はれた。さういふ自分の看護の手ぬかりから不具に近いものにしたのだと思ふと朝暮それを見て居る私の心は苦しかつた。

「死んだ方が此子自身にとつても仕合せだ。」と私は幾度も心の中でさゝやいたことがあつた。さうしてそれは終に私の希望通り三年前の四月二十二日に小さい息を引取つてしまつた。死んでみると生前死んだ方がいゝと考へたことが殊に殘酷なことであつたやうに考へられもするのであつたが、然し死んだ方が此子の幸福でもあり、又われ

等親にとつても仕合せであつたといふ淋しい安心を覺えた。さうしてそれ以來此の子の墓に參ることが何となく私にとつての一つの慰安となつた。それは子供の冥福を祈るといふやうな意味ではなく、その小い墓の前に立つた時の心の中には寺に行つて本尊の前に立つた時よりも、もつと痛切に人間の成佛の姿といふやうなものを認め得るのであつた。あらゆる慾の塊りである自分が、此白童女——私は此子の戒名をたゞ「白」の一字にしたかつた。戒名に一字のものは無いといふことを聞いたけれども私はそれに拘はらず自ら「白童女」とつけてこれを拙童和尚に相談した。和尚は異存を稱へなかつたのである——の前に立つた時には所謂五欲を燒盡して、そこには善もなく惡もない絶對境の門戸に立ちつゝあるやうな心持がするのであつた。此の頃は死んだ當時ほどには屢々墓參もしないけれども、それでも滅多に人を訪問するやうなことをしない私としては此墓の前に立つことは割合に多い方であつた。墓の前に立つて見ると、此佛の母親が供へたものであるか、その兄弟が供へたものであるか、此佛を親身も及ば

ぬほどの愛情をもつて育てた貞さんや澄さんが供へたものであるか、時には色の鮮かな新しい花が供へてあり、時にはやゝ枯色になつてゐる古びた花が立つた儘であつた。彼等は皆如何なる心持をもつて此墓に參るのか、生前の六子に逢ふやうな心持がして此所に來るのであるか、それとも尊い佛に逢ふやうな心持で此所に來るのであるか、それは分らない、又聞いてみたこともない。

「六ちやんが今迄生きてゐたらどうでせう。」といふ言葉が突然その姉妹の口から出ることが今でも往々にしてある。

「大方、晴ちやんに苛められてばかりゐるであらう。」

彼の母親は其都度きまつて斯う答へるのであつた。足も立たず、首もきまらない六歳の娘は、稍々人よりもませて口も手足も達者なその妹の晴子に苛められてゐる光景が、その母親の頭にも、姉妹のものゝ頭にも一時に描き出されるのであつた。

「可哀相に、あれで生きてゐたならばもう今日では相當に發育して口も利き足も立ち、

一人前の女の子になつてゐるのかもしれない。いつまでもあの時のまゝでゐるやうに思つてゐるのは殘酷だ。」

さういふ考が軈て母親の胸にも、長女の眞砂子の胸にも起るのであつた。

「六ちやんが生てゐたら、宵ちやんは一番六ちやんを可愛がつてやるわ。晴ちやんが六ちやんを苛めたら承知しやあしない。」と宵子は、死ぬる前の孱弱い六子の姿を眼の前に描き出して力むのであつた。二女の立子はさういふ場合たゞ默つて眼の中に涙をためてゐた。

今日土筆摘みの序に、其六子の墓に參つたといふことを聞いて母親の面は輝いた。

「さう、お參りしてやつたの。華はまだあつたかい。」

「少しは古びてゐたけれども、それでもまだ大して枯れてもゐなかつたからそのまゝにして置きました。」と立子は應へた。

「壽福寺に土筆が澤山あるのかい。」と私は聞いた。

「えゝ澤山ありますよ。」と眞砂子は答へた。
「お墓の土筆をとつて來るのかい。」と私は重ねて聞いた。
「眞逆、お墓の所のはとりはしません。お墓へ行く道の草原に澤山生えてゐるのです。」と眞砂子は笑ひ乍ら言つた。昔、松山で土筆狩りに行つた自分の子供の時代のことが思ひ出された。松山あたりの土筆は東京近傍ほど多く生えぬ上に、これを狩りに行く人が非常に多いので澤山とることは中々困難である。彼所に一本此所に一本といふやうな乏しいのを狩り集めて小さい風呂敷に一杯にするのはなか〳〵容易なことではなかつた。たゞそれが墓原に出ると、そこは人がとらぬ爲に土筆は林のやうに立つてゐて見るから心が躍るのであつたが、墓原のは氣味が悪いといつてわれ等も決して手をつけなかつた。
「墓のところのでもとつて來ればいゝのではないか。」といつて私は子供等の顏を見た
「厭だわ。氣味が悪いわ。」と子供等は言ひ合はしたやうに私の顏を見た。

「氣味が悪いとがあるものか。骨の上に生えてゐる土筆はおいしいかも知れないよ。」
「こはいわ。」と立子は、眞面目な顏をしてさういふことを言ふ父の顏を不安さうに見た。
「こはいわ。」と宵子も姉と同じやうなことを言つて又私の顏を見つめた。妻や眞砂子が笑つたので二女もまた漸く笑ふことが出來た。私は笑はなかつた。
そんな會話のうちにも一同は皆土筆の袴をとる手を休めなかつた。私がそれ等のまとゐの會話から外れて座右の新聞に目を通してゐるやうになつてから、一同は今日の草摘みの面白かつたことを回想しながら笑ひさゞめいてゐた。私が口を利いてゐる間薄暗かつた燈火が此時再び光を增して、若い女や子供達の顏を華やかに照り輝かしてゐた。土筆の山の傍には眞ッ蒼な小さい塊りが二三十もころがつてゐた。それは蕗の臺であつた。土筆をとるついでに眼にあたつた蕗の臺を摘んで來たものと思はれた。
冬が去つて春が來る時に、眞ッ先かけて大地から青い色を吹き出すものは此蕗の臺である。灰色に乾いた土の上にも黄色く枯れた芝の上にも彼は頓着なしに强味のある青

い鉾先を現はして來て、軈てその葉を成長させて一顆のふくらんだ玉となつて、ひとり春光を占め顔でゐるのである。寒さが勢ひを盛り返して來て北風が吹かうが雪が降らうが、此青い玉は頓着なしにいよ〳〵ふくらんで行く。さうしてその葉の間から漸くにして白い花をはみ出して來る。今席上の土筆の山のそばに並べられてある蕗の臺も、中には白い花を見せてゐるのもある。まだふくらんだばかりの玉なのもある。

「今日もいゝ芹が澤山あつたのですけれど。それはとりませんでした。今度ついでがあつたらとつて來ませう。」と澄さんは言つた。

「さうねえ、とつていらつしやいよ。」と妻は答へた。美しい水田の中に肥えた大きな莖の芹が生ひ繁つてゐるのを澄さんは足を水田の中に入れて摘むのであつた。暖かになると蛭が卵をうみつけるので、險呑であるけれども、寒さの殘つてゐる間はそんなことはないからといつてよく摘みに出かけるのであつた。いよ〳〵春が十分になつて來ると、齒朶の生ひ繁つてゐる山に下駄ばきで蕨をとりに行くとか、春光を浴びて波

打際の岩の上を飛び歩き乍ら若布を拾つて歩くとかいふ蒔田君のことも思ひ合はされて、此若い女や子供の胸が春の野の樂しい遊びに躍つてゐることを想像して私は一同の顔を見渡した。

眞砂子は土筆の袴をとつてゐる手をとゞめて私の顔を見ながら、

「手紙が四五本來て居りますよ。座敷の机の上に載せて置きました。持つて來ませうか。」と俄に今日の摘草の興味から喚び覺まされて言つた。

「行くからいゝ。」と言つて私は一人立ち上つて座敷へ行つた。そこは暗かつたが、電燈をともすと忽ち明るくなつた。空氣の冷い八疊の間がすが〳〵しく私を迎へるやうな心持がした。ふと見ると床の間の花活には菜の花が新しく活けてあつた。

「オヤ、もう菜の花が咲いてゐる。」と私は驚いてそれを凝視した。無論これは早咲きではあらうけれども、鮮かに黄色いその花の色は、春の野面(のづら)の菜黄麥綠を思ひ起さすのに十分であつた。私は机の前に坐つて手紙を開けて讀んでみた。五本が五本とも私

の仕事に關する手紙であつた。その中の二本は言ひ合はしたやうに某々の雜誌社から私の仕事の催促の手紙であつた。一本はホトトギス發行所からの用事の手紙であつた。殘り二本は揮毫に關することであつた。殊にその中の一本は、何故早く揮毫をして寄越さぬのか、揮毫が出來ぬのなら、出來ぬといふ返事だけでも寄越したらよさゝうなものだ、それも出來ぬのならば短冊を送り返してくれろ、といふやうな猛烈な手紙であつた。それのみならず机の上を見ると、選評をしなければならぬ句稿が二三冊も積み重ねてあるほかに、返事を出さねばならぬのをそのまゝにして居る手紙が二しばりもあつた。机の傍に置いてある一つの行李の中には、亡くなつた國元の兄の金錢に關する用書類を自分が處理しなければならぬ爲に一まとめにして持つて歸つた、それがもう半年にもなるのにそのまゝにしてあるのであつた。

「私はこれ等の仕事は何時片附けることが出來るであらうか。」

さう考へると能樂堂で一日半日を費すことが餘りに呑氣過ぎることのやうにも考へ

られるのであつた。けれども亦私がこれ等の机邊の仕事を凝滯するところもなく手まめに處理すると假定したならば、今の仕事よりも二倍も三倍もの仕事が押しかけて來さうに思はれた。今迄の自分を振り返つて見ると、私の机の上には何時でも斯ういふ仕事の滯りの山が築かれて居た。さうしてそれは終に責務を果たすことなしに其儘になつてしまうのが常であつた。例へば此手紙の束の如きも、返事をしなければならぬならぬと思ひ乍ら半年一年を經過してしまつて後に一々その手紙をあけて見ると、いづれももう反古に等しいものになつてしまつてゐる。小說の原稿を書くことや、揮毫をすることや、俳句の選評をすることや、その他家事の雜務の如きも、亦た日を重ね月を重ねてなまけてゐるうちには終にどれもこれも遣らなくつてもいゝことになつてしまつてゐる。「時」ほど無造作に物を片附けてくれるものはない。私は家庭を作りホトトギスを出しはじめてから二十餘年になるが、以上のやうな有樣で机邊の仕事はいつも大半は片附けられずに時の流れの中に芥と一緒に押し流されてしまふのである。

一日

「其仕事の關係者に對し濟まないことのやうにも考へられるけれども、もし私が忠實にそれ等の仕事を片附けて行くやうなことをしたならば、私はもう十年前に死んでゐるかもしれない。」

さう考へて私は、いつも自ら言ひわけをするのであつた。

「人間も機械のやうなものだ。十の働きを持つてゐる機械に二十の仕事をもつて來ると、餘分の十は機械から外にはみ出してしまつて、生地のまゝで置き去りにしてしまふ。さう考へると私が仕事をなまけるのでなくつて私の機械力以上の仕事が私を襲うて來るのである。私の方が惡いのではなくつて仕事の方が惡いのである。斯くして私といふ機械の生活力のある限り働いて、無くなつた曉に壞はれてしまふまでの事である。今夜せめて此句稿の一冊でも目を通すか、それが出來なければ手紙の返事だけでも認めてから寢ることにするといゝのであるけれども、もう私の機械は油がきれて今夜これ以上の廻轉を許さないやうな心持がする。萬事明日に讓ることにしなければな

らぬ。明日に讓るといふことは或は永久に機械にかけないで、芥と共に所謂時の流れの中に押し流してしまふことになるのかもしれないが、それも致し方がない。」

私はさう考へながら疲れた目を長押の方にやつた。そこには鎌倉の舞臺で自分の演じた能の寫眞が四五枚額にして懸かつてゐた。これは去年病氣になつて一週間ばかり臥つた時分に古びた天井や長押のあたりのみを見つめてゐて何も心を慰めるものがないところから、曾て自分の演じた能の寫眞を取り出させて、それを額にしてかゝげさせて漸くそれを見ることをもつて慰藉としたのであつた。

「あの額がまだあのまゝかゝつてゐる。」と思つて私はそれを眺め入つた。

「何故にそんな寫眞のうちに自分は慰藉を見出すのか。」

さう考へると私には明らかな答へを得ることが出來なかつた。

その時隣室には若い女や子供の笑ひ聲が又た破裂するやうに起つた。彼等は今日の摘草の興味に浸りながら尙ほ笑ひ興じてゐるものと見えた。

私は寢床の中に這入ると忽ち死んだものゝやうになつて寢てしまつた。もう夜半でもあつたらうか不圖耳に這入つたのは雨の音であつた。

「オヤ雨が降つてゐるな。」と私は夢現の境にあつてその靜かな音に耳をそばだてた。家族のものは熟睡してゐるやうでその雨の音のほかには何の物音もなかつた。子供達は殊に今日の摘草にくたびれて前後不覺に眠つてゐるらしかつた。それ等の子供達が今宵一夜の熟睡でその疲勞を恢復し翌の朝から又活き〳〵と活動をするのと同じやうに、今日子供達に踏み荒され摘み荒された野原の草は、此雨によつて蘇つたやうな思ひをするであらう。さう考へてみると、此雨は偶然に降つて來た雨ではなくつて、人間が恣まに踏み荒した野原をあはれみ痛んで、自然がわざ〳〵降らしたものとも考へることが出來るのであつた。

さう考へながら聞いて居ると、その雨の音は慈悲に富み、情に滿ちたやはらかい豐かな音であつた。さうして彼の踏み荒された野邊の草や摘みなやまされた土筆の族な

どがこの雨を得て如何に喜び勇んで、その踏みまげられた莖を眞つ直に延ばし、摘み痛められた傷口を癒やすかといふ有樣が想像されて、喜びの色が野邊に滿ちてゐるやうな感じがするのであつた。

私は、その雨の音をいつまでも聞いてゐたいやうな心持がしながら再び疲勞の眠りの中に誘ひ込まれてしまつた。（大正六年三月）

—了—

一日

大正六年七月六日印刷
大正六年七月十日發行

（定價金八十五錢）

著作者　高濱虛子

發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸
佐藤義亮

發行所　東京牛込區矢來町三番地
新潮社
電話番町（八〇九番
八九九番

印刷所　東京市神田區宮本町五番地
電話下谷、四〇六七番
印刷者　高橋治一
新潮社印刷部

振替（東京）一七四二番

■『名作選集』第十九編■ ——第五版出來

■縮刷 俳諧師

高濱虛子著

——定價卅五錢、送料六錢

夏目漱石氏が、「女郎上りの細君の性格をかいて斯樣に活躍せるもの明治に在つて正に空前……」「其夫の十風なるもの亦非凡の出來……」「小生見る所によれば二葉亭の平凡以上……」と激稱せるものである。俳人十風夫婦の悲慘なる生涯を描くに彼の子規以來の寫生文の筆致を以てし、謂ゆるホトヽギス派文藝の最頂點に位置する作物で、明治文壇屈指の名篇として不朽に傳ふ可きものである。飽までも精到な觀察、飽くまでも緻密な描寫、人生の種々相は、繪卷物を繰るやうに其れから其れへと展開されて、其の中には**著者自身の青年時代**が點綴され、正岡**子規**や內藤**鳴雪**翁や、若くして自殺せる古白なども活躍してゐて、作品としての價値以外、更に事實上の興味にも捨て難いものがある。本篇を閑却して小說家としての虛子氏を語ることは出來ないが、また本篇を讀まずして明治の文學を談ずることは出來ない。明治大正文壇の眞傑作を紹介する『名作選集』中、最も意味深き一卷として玆に公にする所以である。

最も光彩ある人物論傳出づ

——初版一週日にして盡き再版出來せり——

評傳 夏目漱石

赤木桁平著

■口繪、寫眞八葉
■特製箱入極美本
■定價一圓二十錢
■送料金八錢

「生涯の輪郭」、「業績の概觀」、「藝術の本質」の三綱目に大別し、漱石先生の生涯、人物、思想、作品等の各方面に亘つて詳細なる記述をなし、確切なる論評を加ふ。著者は評壇の新鋭、漱石先生の生前より其の論傳の執筆に志あり、舊臘先生の長逝するや、既ち門を閉ぢ客を謝して本書の記述に沒頭し、拮据實に五閱月、慘憺の苦心を重ねて玆に漸く公刊するの運に會せり。明治大正の文壇に高照せる巨星の全面容は此の書によりて何人も知ることを得ん。近時最も光彩ある人物論傳として、有らゆる方面の愛讀を待つ。

縮刷獨歩叢書

國木田獨歩作

第一編

武藏野及渚

三版

『武藏野』は獨歩が始めて公にせる第一の文集。自然詩人としての獨歩の本領を最もよく發揮せるもので、散文詩としては天下の絶品と云ふ可く、夙に明治文壇の珍寶として重んぜられてゐるものである。『渚』は、再び起ち難き病床に、泣血の苦心を以て書ける彼が最後の作で、獨歩全作中、最も光輝ある一短篇と稱せられる。別に添へた『岡本の手帳』の一篇は、獨歩の人生觀の眞髓を直叙せる作、全獨歩を覗ふべきキイノオトである。

第二編

獨歩集

再版

獨歩が始めて世に認められたるは實に此の書によりて也。

目次

▼富岡先生▼牛肉と馬鈴薯▼女難▼第三者▼正直者▼湯ケ原より▼少年の悲哀▼夫婦▼春鳥……

■續刊■

- 運命
- 獨歩書簡集
- 濤聲
- 獨歩小品集

■表紙木版手摺美本■一册五十五錢■送料六錢

■新進作家叢書■

新人競ひ起つて面目全く改まれる現下文壇の鳥瞰圖を示すべく本叢書を刊せしが果して大歡迎を受け賣行き極めて盛也。

■中版百七十頁
■定價四十錢
■送料一册四錢

第一■新らしき家　武者小路實篤著（再版）
第二■恐ろしき結婚　里見弴著（再版）
第三■生あらば　豐島與志雄著（新刊）
第四■大津順吉　志賀直哉著（新刊）
第五■生と死の愛　谷崎精二著（近刊）

■續刊■

- ■結婚前　長與善郎
- ■ギプスの床　相馬泰三
- ■偷盜　芥川龍之介
- ■手品師　久米正雄
- ■澄子の兄　江馬修
- ■題未定　中條百合子

大町桂月氏著

■八犬傳物語

■第五版出來せり

桂月先生曰く、八犬傳は小說と云はんよりも寧ろ國民道德の經典と稱すべきもの也。山陽の日本外史と八犬傳とは苟くも日本に生れ苟くも文字を解する程の者は必ず一讀せざる可からずと。即ち此見地に立ちて八犬傳物語を公にせらる。六千枚の原作を十分の一に書き縮め、而も原作の筋を沒せず人物を省かず、變化多き複雜の結構をさながらに傳へ、之を描くに著者一流の流麗暢達の大文字を以てす。眞に近來稀有の一大名著也

■無比の豪華
■特製箱入美本
■紙數五百二十頁
■定價
■定價九拾五錢
■郵送料八錢

■近松情話

岡本綺堂著

近松の戲曲に現はれた美くしい戀、あはれな戀のさまく〳〵を、短篇小說風に書き改めたもので、「お花半七」以下十六篇。色彩の豐かな、韻の高い、作者獨特の文字を以て名優の舞臺さながらに描き出してゐる。若き男と若き女の、うつゝなの戀の夢と戀のなげきとその肉體と情緒の曲線美のやはらかさを描き出すには、まことに此の作者の匂ひ高き筆でなければならない。眞にこれ戀物語の粹にして、亦情話の粹である。

第四版
第五版
定價
定價八拾五錢
送料八錢

竹久夢二氏裝幀
濃艶極美本
切版

島崎藤村氏作

■縮刷 破戒

▼價六拾八錢、送料八錢

第三版

■縮刷 家 全一冊

▼價八拾五錢、送料八錢

第三版

田山花袋氏著
三部作縮刷完成

(1) 生 再版

(2) 妻 三版

(3) 緣 三版

定價各五十五錢＊送料各六錢

『生』は若き文學者の生活を中心として新しく伸びゆく命と古く朽ちゆく命との對照に生の悲劇を描き『妻』は一文學者の壯年時代を描き主として兩性關係の祕蔵をあばく。『緣』は蒲團の後日譚とも稱すべきもの。何れも、花袋氏の自傳小說也。

夏目漱石著（六版）

■漱石選集 色鳥

定價壹圓參拾錢、送料八錢

曾て如何なる集にも收められざる『倫敦消息』に始まり、『我が輩は猫』『二百十日』以下、漱石先生が十數年間に亘れる全著作中より最も代表的なるものを選び、その短きは都べてを採り、長きは最も要所切所を含める部分をとりて其の前後を解說し、而して是れを歷史的に排列して以て一冊となす。堂々五百五十頁。まさに、漱石先生全傑作選集と呼ぶ可き也。

■新刊の創作四種■

■長篇小說
虛榮
長田幹彥著

七百枚に亘れる長篇小說也興味を中心とせるものながら豐潤の藝術味の一卷を貫くところ、正に此作者獨壞の境地と云ふ可きもの也。

特製極美本
五百七十頁
定價金壹圓
送料八錢

■長篇小說
誘惑
德田秋聲著

秋聲氏獨得の世相描寫心理描寫の諸刻と迫眞とを見る可き大作にして、女性を描くこと當代第一の稱ある作者の眞手腕を窺ひ得可し。

池田輝方
池田蕉園畫
定價金壹圓
送料八錢

■
祇園双紙
吉井勇著

著者獨特の詩境を見る可き『祇園双紙』『舞姫と僧』及び『浪華風流』の外、文を以て叙し歌を以て補ひたる長篇の『京阪艷女傳』の附錄あり

竹久夢二裝
特製極美本
價六拾五錢
送料六錢

■
青葉若葉
近松秋江著

小品二十篇、自然を賞し女を品し羈旅の懷ひを描き狹斜の情を寫せるもの、詩味に富み世間味に豐かなる秋江氏の面目を髣髴し得ん。

特製美本
二百四十頁
價五拾五錢
送料六錢

終